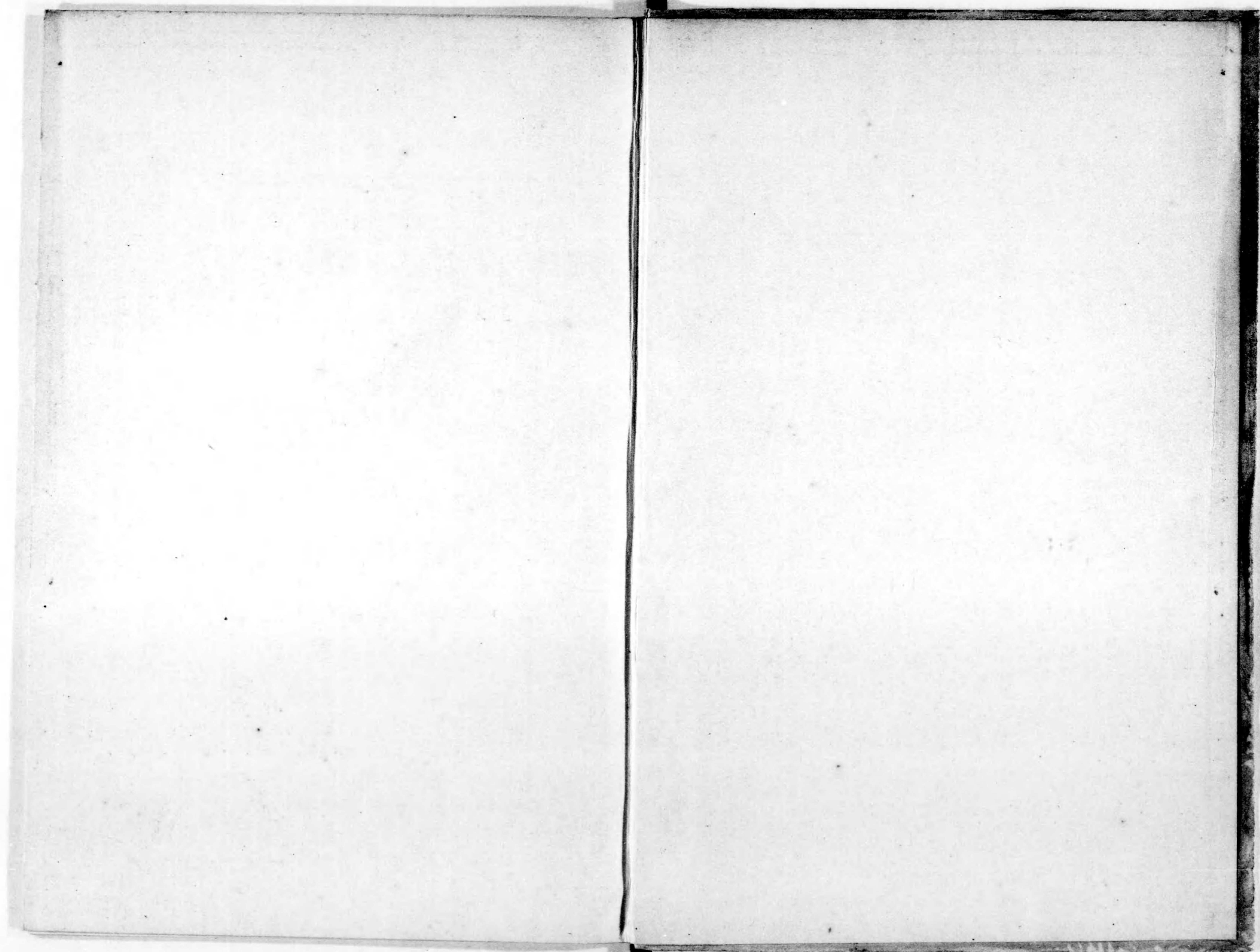


始





特103
887



永島忠重著

大正

14. 1. 13

丙寅

はしがき

之は數年以來折にふれての隨筆である。私は固より文士でない、文筆の技にも亦眞に拙なる者である。故に之は雜然として路傍に萌え出たる野草のやうなものである。人の目を娛ましむる花も姿も無いのは致し方が無い。

ケーベル先生の書翰は序文に代へて贈られたるもの故茲に掲げる。だが書中私に對する先生の期待は勿論當らない。私は寔に故先生の知遇を辱しむる者である事を深く遺憾とする。

大正十三年春日

湘南 逗山草堂に於て

永島忠重誌

ケーベル先生の

著者に寄せたる書翰

拜啓

貴君が或る著述に——近く公にされんとする一種の回想や、貴君御自身の生活の中からの報道其他より成るものに——従事して居られるといふことは、私のもう餘程前から承つてゐたところであります。私は大變緊張してそれを待つてゐました。それは日本の『隠れたる』智慧は常に特別に私の興味を惹いたからなのです。しかも恰も貴君の手に成る著書において私はさういふものを見出し得ようと期待した次第であります。私はこの期待が外づれるやうなことはなからうと信じます。我々の友Kが昨日貴君の原稿數頁を携へ來つて、全勞作が既に完成したと告げたとき、私は驚かされたと同時に嬉しく思ひました。Kは直にその中から數頁を譯してきかせましたが、貴君の簡素な正直な言葉や思想は非常に私の氣に入つたのでした。それで多くの人々——即

ち私が日本の『知られざる賢者』と呼んでゐるところの人達の中に數へらるべき人々——も亦同じことを感ずるだらうと信じます。思ふに、これ實に——私が貴君を理解する限りにおいては——貴君にとつても亦主要事でありませう。如何なる著述家も萬人に氣に入ることとは出來ず、また氣に入るべきでもないであります。御機嫌よろしく。來るべき年における貴君の御多幸と御仕事の上に常に歡喜を持たれんことを祈ります。 敬具

一千九百二十二年十二月二十一日

横濱にて

ラファエル、ケーベル

(久保勉氏譯)

目 録

○時代の勢……………	一
○青年の大望……………	二
○天下を取るとは何事ぞ……………	三
○退いて思ふ……………	三
○金原老人との會話……………	四
○其二……………	八
○中學校の入學式に列席して……………	八
○眞面目なる滑稽……………	一〇
○教育者の口癖……………	一一
○教育者の私情……………	一二
○吾等の運命……………	一三
○喧嘩腰……………	一三

- 漢學塾を回顧して……………二四
- 忘れ難いもの……………二五
- 人の妻たる者への一言……………二七
- 恐ろしい基督者……………二八
- 子供のしつけ……………二〇
- 詰問に答へて……………二〇
- 示導者を失なつて……………二二
- ダンテに倣うて……………二二
- 明且を待つ……………二三
- 冬の一日……………二三
- 聲も出ない……………二四
- 吾等人類は半ば狂してゐる……………二五
- 兄弟に對して……………二六

- 幽靈……………二六
- 諺を思ふ……………二七
- 天分……………二八
- 亂賊の類……………二八
- 神風連……………二九
- 青年の平凡化……………三〇
- 思案に餘る時……………三〇
- 最上の寶……………三一
- 無根據……………三三
- 人類進歩の遅々たるは……………三三
- 衰へたる哉……………三四
- 誠拙和尙……………三五
- 勝海舟先生を訪問せる者の談……………三六

○國運を賭するの事	三九
○遠雷のやうな響きを聞いて	四〇
○盲人	四三
○『基督の模倣』	四五
○ケーベル先生	四六
○KH氏の懷舊談	四九
○自殺者	五〇
○何處に自由がある	五一
○老、莊	五一
○共に溺れんとす	五二
○靈に於て目覺むる時	五三
○一日も早く打破すべきもの	五三
○今日の教育	五四

○富者の不幸	五五
○世人の念とするところ	五六
○科學者に對する一希望	五七
○途上見るに堪えざるもの	五七
○不平等	五八
○久しぶりに基督教會へ出席して	六〇
○俗累	六一
○選舉の競争	六二
○偶感 二首	六四
○眞劍なる主張	六五
○日曜學校	六七
○宗教と科學	六八
○草庵の空氣	六八

○理想高きに過ぐ……………六九

○他に對して輕侮の念を起す時……………七〇

○無能にして世に爲すなきを悲む時……………七一

○祈……………七二

○無用の偏物……………七三

○基督教徒に何を期待し得るか……………七四

○蒔いた種子……………七五

○愛國者……………七五

○自然界と靈界……………七六

○治道……………七六

○學校の寄附金募集……………七七

○下駄屋の爺……………七八

○滑稽なる哉……………八一

○銅像……………八二

○哀悼靈團……………八三

○樂觀と悲觀……………八四

○百姓は呑氣なものか……………八五

○百姓は馬鹿にも出来るか……………八六

○百姓の戰……………八八

○重大問題……………八九

○顛倒せる暗世の縮圖……………九〇

○恐るべき石……………九一

○眞實眞面目の人……………九二

○無理なる注文……………九三

○講談……………九三

○勸業債券……………九四

- 地方人の誇 九四
- 時勢の推移 九五
- 札幌農學校最初の校長 九六
- 進退行藏 九九
- 偏狹なる愛國主義 一〇一
- 道樂 一〇四
- 不良少年 一〇四
- 忠告に對して 一〇五
- 故老に告げたい 一〇七
- 腕力と小理窟 一〇八
- 自問 一〇九
- 檢事と辨護士 一一〇
- 洗足池畔の低徊 一一一

- 世に充滿する者 一二四
- 小楠先生 一二四
- 二天の畫に對して 一二六
- 白隱禪師 一二六
- 村の百姓の談話 一二七
- 根本通明翁 一二九
- 梅田坂 一三〇
- 山家集 一三一
- 倒瀾 一三三
- 無感覺、無責任 一三四
- 山岳を汚すな 一三五
- 深草の元政 一三六
- 厚氷 一三七

- 柔能く剛を制す……………二二八
- 藤の蔓……………二二九
- 政府……………二二九
- 友人のために齋名を選ぶ……………二三〇
- 下學上達……………二三三
- 二而一の道……………二三三
- 『吾れ世に勝てり』……………二三三
- 嚴冬の旭日……………二三四
- 後の雁が先になる……………二三四
- 基督者……………二三六
- 畑の雑草……………二三七
- 田舎で見る厭な事……………二三九
- 老人の油断……………二四〇

- エックハルトの感想抜粹……………二四二
- 明恵上人……………二五二
- ルウソウの懺悔録……………二五五
- 大學教授某博士の著述……………二五五
- 〇〇縣下に在る御料林の事……………二五七
- 田中正造翁……………二五九
- 或人の遺言……………二六〇
- 居る處も無い時に……………二六一
- 西郷南州……………二六二
- 露國饑饉の際……………二七一
- 徹底的改造……………二七二
- 或中學先生の述懐……………二七四
- 定見深睡……………二七四

- 歴史……………一七五
- 良寛和尚……………一七六
- 詩人タゴール……………一七八
- 尙武……………一八一
- 朝鮮……………一八一
- 無信仰……………一八二
- 大聲は里耳に入らず……………一八三
- 國家の名に由つて爲される事……………一八三
- 終にどうなる……………一八四
- 天下又大いに亂れん……………一八五
- 現代人……………一八五
- 天下の兄弟に問ふ……………一八六
- 己を以て正しと爲す……………一八七

- 外交……………一八七
- 雜魚と鯨……………一八八
- 政府の專賣事業……………一八九
- 良心……………一八九
- 人心惡化の一因……………一九〇
- 超然たる態度……………一九一
- 眞に自由なる人、眞に餘裕ある人……………一九二
- 友……………一九六
- 味無き鹽……………一九七
- 隱居……………一九九
- 新井奥蘧先生……………二〇〇
- 奥蘧先生を思慕して……………二一一
- ハリス先生……………二二五

時代の勢

時代の勢は寝々乎として進んで行く。よい氣に成つたり、豪い者の積りであるたり、愚圖々々してゐると、何時の間にか皆取り残されて了う。

時勢は何の用捨もない。だから時勢に打ち遣られた者は、官廳にも、議院にも、軍隊にも、學校にも、町にも、村にも、何處に行つても、何程にても見出される。

故に時代錯誤とか、時勢に逆行とか云ふ事は、實は世間普通の常事である。やうやく時勢と歩調を共にして行く者さへ少数である。況んや時勢に先き立つて行き、時代を越えて進む程の者は、何時も必ず曉天の星の如くであらう。彼等は迫害に會はなければ僥倖である。

青年の大望

明治十八九年の頃、私が同人社に入學してゐた時に、或日叔父が尋ねて来て、

『お前は一たい何に成らうと云ふ目的か』

と言ふから、私は眞面目で

『代議士に成る積りです』

と答へた。すると叔父は大きな事を言ふと思つたものと見へて、私の顔を見ながら笑つてゐた。實際私自身も其れは可なり大きい志望であると思つてゐたのである。之は今日から思へば餘り滑稽のやうな談であるが、其頃代議士と云ふ者は即ち國民の選良であり、國會と云ふものは眞面目に國事を討議する處であると、誰しも夢みて居たのである。其れは必ずしも青年のみの空想ではなかつた。誰が今日のやうな選舉費を費つて、今日のやうな代議士が集つて、今日のやうな議會が出現するものと、假にも想像しやうぞ。人事の宛にならず、吾々の期待がはづれるのは大概此類であらう。

其後私の性格も段段變つて、遂に一度も代議士に成らうと思つた事もなかつた。

天下を取るとは何事ぞ

苟めにも天下を取ると云ふは抑抑何事であるか。凡そ人の上に立たんと欲する心、暫も政權を握つて自ら用いんと欲する念、其れが即ち大なる私慾である。野心である。不心得の甚だしきものである。之を人間の支配慾などと稱して肯定し、更に怪まないのは皆暗いからである。

之等不正、不義、不信、不徳の輩が厚顔にも出て一國の政治を司どり、邦家の經濟を理するといへば、善い事の出来やう筈はない。どんな立派なことを言ひ、どんな文句を並べても、其れは人を欺き、自ら欺くだけの事である。何の甲斐も在る譯はない皆一時を糊塗して、禍を残すだけの事である。

退いて思ふ

嬰兒が母の膝に懷かれて、只何心なくほゝ笑むのを見れば、そぞろに過去の靈界が偲ばれる。子供等が日の暮るをも忘れて遊び戯るゝを見れば、此地も天を距ること遠くないと思はれる。

退いて思ふ。吾等は之を養ひ、教へ、叱り、競はせ、束縛し、善導する積りで地獄に追ひ込みつゝ、其貴い、美しい天性を破壊し、磨滅し去るやうな事をして居るのでないか。

『この小子の一人を躓すよりは磨石を頸に懸られて海に投入られんこと其人の爲に宜かるべし』

金原老人との會話

金原明善と云ふ人は、明治の一名物男と云ふ者であらう。詳しい傳記は静岡縣廳で出版した『金原翁と其事業』と云ふものと、碧瑠璃園の『金原明善翁』と題する本がある。

私が初て此人に會つた時は、既に八十四と云ふ高齢と聞いたが、未だ鏗鏘たるものであつた。其時老人は

『今度私は宮内大臣に會つて、訊いて見たいと思ふ事があつて東京へ出て來ました。其れは私の縣に御用邸が在つて、高貴の方々が毎年御避寒とか、御避暑とかに御出になる。其都度知事は必ず御出迎ひに出る。御滞在在中に近在へ見物などに御出懸になる事があると、又必ず知事が御案内に參る。御歸京の時は又々必ず御見送り申と云ふ風である。一たい、知事なるものは牧民の官である。其れが斯う云ふ事に暇を潰してゐて可いものかどうか。其れが御上の御主意であると云ふのかどうか。私が若し知事であれば、あゝ云ふ事をしては居られないと思ふ。其れが御上の御主意であると云ふことならば、私ならば早速辭職します』

と云ふ談であつた。之を聽いて私は老人に一寸反問した。

『成る程知事は牧民の官に相違ないが、あなたは今の官吏に、自己の利害を忘れて只民の幸福を思ふなどと云ふ、誠忠の士が何處にか在ると思ひますか』

『それからまた私は浪人であるから誰に遠慮もないので言ひますが、今の宮内大臣は大分財産を拵へたと云ふ事である。而して近頃は廣大なる邸宅を新築して、人に自慢して居ると云ふが、一たい、宮内大臣と云ふ役は金が儲かる仕事であるのか。私は廉潔の士ならば、百年宮内大臣を勤めてゐても或は借金が残るかも知れないと思ふ。今の宮内大臣の如きは累を皇室に及ぼすと云ふ不都合者であらう』

と言つたら、老人は頗る喫驚した様子で啞然としてゐたが、やがて突然思ひ出したやうに

『私は世間に談し相手が無いものと思つてゐたが、あなたとは談しが合ひさうだ』と言つた。私は八十餘歳の老人にさう言はれて、光榮であるとも思はなかつたが、

『私はあなたの孫のやうな年ではあるが、談が合ひさうならば遠州へ行つて緩つくり談ませうか』

と言つたら、老人は更に言に力を込めて、

『是非いらつしやい、私もあなたの處へ上ります』

と言ふのである。私は老人に對して其れは些と氣の毒だと思つて、

『私の家は雜司ヶ谷の方で、餘り不便な處です』

と言ふと、老人は又

『いや丁度目白の山縣元帥の處まで行く序がありますから、其時に上ります』

と、元氣好く應ずるのである。私は此人も矢張り權門に出入するのを名譽とでも心得てゐるのかと、少し意外に思つた。そこで又露骨に

『山縣と云ふ男は自分でも元勳とか、元老とかを以て居り、世間も亦其れを許してゐるが、其實あれは藩閥の元兇と云ふものだらう。同じ長州人でも伊藤の方は俗才子の類ではあらうが、淡泊な處がある。だが山縣に至つては固陋で、陰險で、甚だ善い感じのしない男である』

と言つた。すると老人は又々調子を合はせるやうに

『私もあの人は腹が黒いやうに思ひます』

など、言つてゐた。

翌年の夏、私は遠州天龍川のほとりに、金原老人の閑居を訪ふて、一と晩、老人と談した事がある。其時老人は、机の上から一封の書状を取つて、

『昨日澁澤から斯んな手紙をよこしました、青山の原に明治神宮の外苑を作るので、寄附をして呉れと云ふのです』

と言ひながら、其れを見せるのである。私は

『そんな馬鹿げた事に一文も出さざるな、そんな事に金を遣ふのは明治天皇の決して御喜びになる事ではない。其れは明治天皇を尊崇追慕する爲の企てに相違なくも、總て其様な事は明に天皇の御意志に反する事である』
と言つたら、老人も首肯してゐたが、其後果してどうしたか聞かなかつた。

中學校の入學式に列席して

子供が初めて中學校へ這入る時、私は附添ふて入學式に列席した。而して校長の、

新入生へ對する心得として、長い訓示を述べるのを聽いてゐた。すると校長は聲を厲まして、

『小學校を出て中學に入る者は全國を通じて漸く十人に一人位の割合である。だから諸君は既に其十人中の一人と成つたのである。故に平生此事を能く念頭に置いて、自ら重んじ、自ら慎まなければならぬ。而して行く々々は百人中の一人と云ふ者になり、猶進んで千人また萬人中の一人と云ふ程の者に成らうと心懸けなければならぬ』
と言つてゐた。私は此處でも斯う云ふ心得達の事を吹き込んで呉れるのかと、意外にも思ひ、失望もした。

其れは結果から言へば、さうありがたいものである。だが自分で多少でも他に勝つてゐると思ひ、而して猶愈々人を凌がうと心懸るならば、何程知識の點に於て他に勝り、形式に於て間然するところが無いにしても、心の根本に於て道德の基を誤つて了う。

よく世間の先生達が『他の手本になるやうに、人の模範となるやうに心懸よ』と、子弟に對して戒める積りで言ふものであるが、矢張り之と同じやうな、馬鹿々々しい

不自然極まる談である。自分が期せずして他から尊敬を受けるのは善いが、自分から他の手本に成らうとするなどは不遜の甚だしいものである。それは即ち世に滔々たる偽善者となるばかりである。

一たい自慢高慢の俗情は甚だ増長し易いものである。然るに之を子弟に抑制せしめやうとはしないで、却つて之を煽動するやうなことをしてゐるのが現今の状態である。教育者を以て高く自ら任じて居る者までが、多くは斯る心得違の了見を懐いて、それを子弟の間に鼓吹してゐるのであるから、何程騒いだからとて、民情は益々險惡に成るばかりである。其れに何の不思議があらう。

眞面目なる滑稽

或豫備軍人で普通教育にたづさはつてゐる者が、或時生徒に對して眞面目に『諸君が他日自分よりも偉い者に成つて呉れるやうに希望する』云々と言つて居るのを聽いて、私は少しく滑稽に感じた。其れは自分が少將であるとか、大將であるとか

云ふのを、偉い者にでも成つた氣で居るらしいからである。其れは滑稽ではないか。だが彼等は全く階級制度の嚴しい中に育つて來た者である。無邪氣にさう思ふのも無理はない。而して其れは何も軍人に限つた事ではないであらう。

自分が自分を何んと思つてゐやうとも、其れは各自の勝手であらう。ただ人の子弟に向つて、苟も自分を偉い者の類であるかのやうに突き出すに至つては、随分可笑しな、變なものではないか。

由來軍人の古手などは概して偏狹固陋な者であらう。さうでない者が在れば、其れは例外であらう。彼等を用いて普通教育に與からしむると云ふのが、矢張時代錯誤の一つであらう。彼等は職掌柄軍國主義の宣傳者としては寔に理想的の者であらう。

教育者の口癖

よく教育者が父兄に向つて『學校の事に附いて何か氣の附いた點が在つたならば遠慮なく注意して貰いたい』など云ふ。だが眞にさう思ふて言ふのか、或は只の口癖

であるのか、それとも體裁のよい挨拶のやうなものか。兎に角若しも其言を眞に受けて、少しでも何か氣の附いた事を言ひ出さうものなら、大抵は頗る機嫌を損して了う。而して淡泊に人の言に耳を籍さうとしないばかりか、往々曲解して、人が惡意でも持つ者かの如くに受取らうとする。私は斯う云ふ經驗を持つこと一再ではない。

教育者の私情

教育者たる者が自分の學校を善いと思ふのは、即ち私情から起る錯覺に相違ない。考へて見るがよい、如何に有力なる君子人と雖も、手も回らず、心も届かず、甚だ遺憾に思ふ事のみ多い筈であらう。決して自分の學校が理想通りに行くとも思はず、満足も出来ない筈であらう。故に能く自分を知り、能く責任を感じる程の者は、敢て自分の許へ子弟を集めやうとも、留めやうともしない筈であらう。之に反して、只入學者の多きを喜び、偶ま去る者あれば之を怨む如きは、全然私心私情に囚はれたる俗物の事であらう。實は彼等に教育者たるの資格は無いのであらう。然るに今の滔々たる教

育者達は大概此類ではないか。

吾等の運命

吾等は曾て獨逸帝國から凡らゆるものを取り入れた。特に最も多く取り入れたのは、彼の軍國主義であらう。今にして早く改むべきを改め、棄つべきを棄てなければ、吾等の運命も亦獨逸に似ざるを得ないであらう。

併しながら吾等の現状は、既に病菌深く血液に浸入して、名醫も手を下すに窮する有様ではないか。誰か之を救ひ得やう。

喧嘩腰

動もすると直ぐに喧嘩腰になるのが吾々の癖ではないか。國際關係の事でも直ぐに腕を扼して懸る風がある。之は了見が小さいのか、根性が善くないのか、何れにしても甚だ宜くない、見苦しい癖である。

一千九百二十一年の秋、ワシントン會議を開かうと云ふ報が傳はると、忽ち國內は物議騷然たる有様であつた。當時の新聞を見ると、『危急存亡の秋である』とか、『元寇以來の國難である』とか、『亞米利加は吾に軍備の縮少を迫つて、而して後に必ず吾を撃つ積りに相違ない』とか、『恰も被告として法庭に引き出されるやうなものである』とか、『我國も狙上の魚同然である』とか、『家庭の私事にまで干渉されては誰も面白い者はあるまい』とか云ふやうな談が毎日出てゐる。之は皆我國の堂々たる政治家、または、或種類の愛國者達の感想或は議論である。

斯う云ふ風に騒いだ人々は其後どうしたのか、今は大抵けろつとしてゐる様である。だが又何か一寸した事が起ると、直に國難だの、臥薪嘗膽だのと言つて騒ぎ出すのが例である。吾々は列國から蝮蛇か狂犬のやうに思はれなければ幸である。

漢學塾を回顧して

私が子供の頃には田舎の漢學塾で四書五經の素讀を教へたり、詩を作る事などを教

へたものである。勿論子供に讀んでゐる本の意味が解る筈もなく、詩などは先生から題を出されて、仕方なしに平仄と韻とを當てはめた文字をよい加減に列べただけの事である。總て昔風の教育と云ふものは斯うしたものと見へるが、今日から思へば誠に馬鹿々々しい事ではないか。

併しながら今の教育なるものも、多くは無用無益の事を強ひて、徒に子弟を苦しめ、可惜歲月をつぶさせながら、これで吾々は結構な教育を施す積りで居るのである。何れ遠からず吾々の子孫が其累を收穫せなければならぬ。而して其時に吾々の愚なる過を憐れむであらう。

忘れ難いもの

私は青年の頃初めて北海道に旅した時、先づ函館から紋籠を見に行つた。それは最初の開懸成功地として、當時第一に數へられた處であつたからである。

其處は維新の革命後間もなく、仙臺の支藩亘理の君臣が一團と成つて移住し、双刀

を鍬鎌に替へ、つぶさに艱難を嘗めて開いた處である。だから其處にはピウリタンの移住を連想せしむるものが在る。

私は紋籠へ着いた翌日、獨り旅館を出て其處此處となく見物しながら散歩してゐると、何時の間にか村はづれへ出た。ふと、路傍に草葺の屋根も朽ちて、哀れに見ゆる一軒の農家の前を通りながら顧みると、家の前の庭に二三本の林檎の樹が在つて、美事に熟した赤い林檎が澤山なつてゐる、其れを丁度お婆さんが家の孫らしい子供に籠を持たせて、取つてゐるのを見た。私は多少喉も渴いてゐたし、如何にも其れが甘さうなので、門の外から

『お婆さん其れを二つ三つ賣つて呉れませんか』と言つて見た。するとお婆さんは機嫌好く

『さあ上げませう、なに錢などは入りませんよ』

と言ひながら、籠の中から良さうな物を三つばかり持つて來て呉れた。私は只貰つては濟まないと思つて、強ひて何程か渡さうとした。けれどもお婆さんは

『錢など入るものですかと』

と言つて、何んとしても受取らない。而してサツサと又樹の下へ行つて了つた。私は據ろなく繰り返して其厚意を謝し、快く只で貰つた。而して早速歩きながら皮のまゝで喰べた。樹で能く熟した上に、取りたてのためでもあらうが、私はあんなに旨い林檎を喰べた事がない。

だが三十餘年後の今日に至るまで、忘れ難いのは林檎の味の旨さよりも、あのお婆さんの偽りない厚意である。たかが林檎二つ三つの事ではあるが、見ず知らずの他人に只で物を呉れる者は無い。

不用意にする斯る些細な事柄でも、無慾の行爲はど人を喜ばせるものはない。其れ程世に美しいものはない。唯この無慾にして爲る事、其ればかりが人を活かす。其ればかりが世を幸にする。唯其ればかりが人を益し、國をも興し、天下をも新たにす。

人の妻たる者への一言

レッシングの『賢者ナアタン』の中に、聖廟騎士は

『坊主と婦女子は悪魔の兩腕であると云ふ格言こそ能くも穿つたものである』と獨りごとを言つてゐる。

また皇帝ザラデインは

『女と云ふ者は何時も男子を自分と同等の程度にまで引ずり卸さうとしたがる』と言つてゐる。

凡そ女性が人の妻となつて、夫の徳を助成しないで、其累となるやうな事が在つてはならない、故に妻たる者の最も大切なる心懸は、平生固く向上の志を保持して、世の虚榮偽善に對し、力を極めて反抗する事である。

恐ろしい基督者

私は未だ能く世間を知らない青年の頃に、或事情に由り、不圖或人に大金を用立てた事がある。ところが間もなく其人は破産して了つた。其ため私は非常な苦境に陥つ

た。

其後また十幾年も過ぎて、自分が經營してゐた仕事を、資金の都合上、或人に譲渡した事がある。ところが其人は後になつて突然契約を反古同様にして了つた。其ため私は又一家を困難に陥れた。

私が相手にした之等の人々は何れも皆基督者であつた。それで私は先づ相手に信を置いたのである。其れが抑も私の輕卒であつた。假令國家だの、道義だの、神だの、基督だのと口癖のやうに言つて居る者でも、自分の利害損徳に關する事となれば、大抵は義理も人情も在つたものではない、平氣で堂々と勝手な事を押し通うさうとする。基督者と云ふ者は恐ろしいものと思つた。

また翻つて思ふ吾々は眞面目に考へ、眞面目に言ふ。けれども實際卑近の事に就て、其れを眞面目に、最善の心を盡して、履行するを怠る。其れは考へたり、言つたりするやうなものでなく、躬行は甚だ厄介であり、實踐は都合が悪いからである。それで吾々は知らず／＼言行不一致の事を爲る。日常卑近の事を離れては、ほんどうの修養

は出来るものではない。然るに之を忽にする。而して後から勝手な理屈を付けやうと考へる。

子供のしつけ

よく世間に子供のしつけと云ふ事を氣にする親が在る。之は本末顛倒の嫌ひはないか。先づ親達各自が反省もしなければ、修養もしないで、而して難きを子供に求め、完きを子供に望むと云ふならば、其れは無理な事である。無益な事である。効も無い事である。抑も其れは僭越な事である。

近頃流行の『思想善導』とか、『民心作興』とか云ふは、政府者流の常套語であるが、愚なる親達によくも似たる心遣ひでないか。

詰問に答へて

私は度々『何故世間に出て叫ばないのか』『なぜ社會に出て活動しないのか』と云ふ

半ば詰問的の質問を受ける事がある。私は何も沈黙して居りたい譯もなく、無論安逸を貪ぼる積りではない。だが公衆を集めて演説するとか、會を設けて運動するとか云ふ事は、只私の性質に適しないのである。逆も私はさう云ふ事を爲る氣にもなれず、また實際さう云ふ藝も無いのである。

それは誠意が足りないのである、憶病であると言はるれば、私は固より辯解の辭はない。併し私はまた自分の言ふことが人に聽かれない事、自分の意見が世に用いられない事もよく知つて居る。だから徒に暇をつぶしたり、無益に奔走しないだけの事である。

『此世に拒まれるれば正に天路を行くべし』と云ふ。また『時可ならずして基督と共に神に隠るは智慧の子なり』とも云ふ。世に爲す事なければとて吾等は毫も失望するに及ばないのである。また思ひ煩ふべきではない。吾等の生命は永久のものである、故に必ず天命の別に存するあるを思ふて、安んじて、楽しんで、撓ゆまず、進むべきである。學ぶべきである。

示導者を失なつて

私を教へ、導き、諭し、叱つて、私の心の目を覺まさうとし、俗習を脱せしめやうとし、困難の間に天路を辿らしめやうと、鞭撻激勵して呉れた私の貴い示導者達は最早此地に居なくなつた。今更其れを悲しむ譯ではないが、ただ折々に私は孤軍奮闘の心細さを感じざるを得ない。

ダンテに倣うて

私は青年の頃から、俗悪極まる者共が交る々々政權を握つたり、陰險なる野心家等が樞要の位地に立つたり、卑劣狡猾なる慾深共が華族に成つたり、其他大小様々なる不都合な事ばかり見續けて來た。何時かダンテの神曲に倣ふて、其れ等を地獄の道中記に書いて見ようかと思ふ。

明且を待つ

此世の悩み多く、人々安き思ひもなく、苦悶苦闘する様を見ながら、之を救ふ術も見出し得ないので、時に私は堪へ難い悲痛の感に沈む。自己の徳も成らず、人の過を論すことも出來ず、此世に手の着けやうもない事を思ふ時に、私は忍び難い悲哀を感じる。けれども亦永遠に於ける神の攝理を思ひ、只神に由つて靜に明且を待つのである。

冬の一日

心に感謝して家族と共に粗末なる朝飯を頂く。子供等は霜を踏んで各々元氣よく學校へ出て行く。私はざつと二三枚の新聞紙に目を通す。而して鋸と鉋とを携へて、獨り讚美を歌いながら向ひの山へ上つて行く。之は一年中の薪を作らんだためである。日蔭には未だ消へ残りの雪が在る。けれども労働する者は直ちに汗をかく程暖かになる。何事も忘れて働いて居れば、短い冬の日は更に一層暮れやすい。夕飯の馳走とても、此頃は大抵手作の大根を入れた味噌汁ぐらひである。それでも疲れて食する者には甘いと思はぬためしが無い。夜は爐を圍んで、妻は古着を繕ひ、子供等は明日の日課の

調べに、各々思ひ々々の勤めがある。私はまた聖賢の遺書を聞いて、心ゆくばかり懐仰の思ひを致す。ア、山里に住む身は食しけれども何たる幸福ぞと思ふ。生活難の叫喚其儘のやうな人々のあはただしき往來。勝ち誇れる者の鬨の聲のやうな自働車の響等、目のあたりに修羅の光景を見るのは吾等の堪ゆるところではない。

だが斯く身も魂も伸び々々してゐるのは、只天命に任せて何事も打忘れてゐる時だけの事である。此世に充ち満る兄弟の不幸や、己が一家にも迫り來る明日の飢餓を思ふ時、直ぐに又心の空は暗雲に閉ぢられて了う。

聲も出ない

欧州大亂の後、將來又斯る大罪惡と大慘禍とを繰り返す事なきために、企てられたる計畫はごうなつたのか。國際聯盟も今は有名無實ではないか。列國は相も變らず互に猜疑と不安の惡夢に襲はれつゝ、油斷も出來ない有様である。吾々は大戰以前に比較して、少しも改善悔悟の實を擧げないのである。のみならず全世の風潮は一層險惡

の度を加へつゝある。

人は能く漫然として永遠の平和とか、東洋の平和と云ふ。けれども果して其衷心より眞實平和を愛し、平和を祈願するものか如何。或は平和を口にして其實戰爭を鼓吹する者も在る。惡魔も聖書を引用すると云ふ、吾々はうつかり彼等の宣傳などに欺かれてはならない。

今の如くにして推し進めば、又遠からず大亂となるのは極つた事ではないか。ごうして吾等の將來に平和が來やうぞ。其れこそ根も無い空想である。吾等の將來は誠に暗歎たるものである。眞に吾等人類の不幸を不幸とし、悲慘を悲慘として哀しむ者は、聲も出ないで泣かざるを得まい。

吾等人類は半ば狂してゐる

吾等はごうして斯くまでに不義、不善、無知、暗愚の狂態を演じつゝ、兄弟の不幸を遠近四方に目撃しつゝ、子孫を悲慘の深淵に導きつゝ、何時までも過を覺らず、之

を改めやうともしないのであるか。

吾等が本然良貴の性情は、既にいたくも破壊されて、半ば狂してゐるではないか。之は天下眼前の事實である。

兄弟に對して

『凡そ兄弟に對して愚か者よと云ふ者は地獄の火に投げ入れられん』と、吾等は無知や、暴慢や、様々の悪事を日常目前に見せ附けられたり、また突き附けられたりする。けれども假令口に出さず、心の中に於てさへ、之を悲しむとも、或は憐れむとも、苟も怒つたり、恨んではならない。吾等は時に餘りの馬鹿らしさに憤激することもあらう。或は痛罵さへ加へんとすることもあらう。けれども至温至柔の天徳を體得しやうとする者は、『蛇の如く智に鳩の如く柔和なれ』との聖訓を嚴守しなければならない。

幽 靈

科學者は言ふ、人類は只下等生物より進化せる物のみと。文士は言ふ、吾等は宜しく本能に忠實なるべしと。新人は言ふ、神は人間の創造せるものなりと。而して此世の智者は言ふ、宗教は愚人の奉ずるものであると。

憐れなる哉、然らば人間には望みとすべき望みも無く、人生は畢竟絶望の旅ではないか。其處に何等の價值も無く、威嚴も無い。一切皆空ではないか。其れは生きながら既に死んでゐるのでないか。而して猶マゴクしてゐるのは宛然たる幽靈ではないか。

諺 を 思 ふ

『金錢は他人である』とか、『人を見たら泥棒と思へ』とか、『泥棒にも三分の理がある』とか、『盗人武け々々しい』とか『口に蜜ある者は腹に劍あり』とか、云ふ昔からの諺を思ひ出す適切なる機會は何人にも屢々在るであらう。

人を馬鹿にするよりは、馬鹿にされる方が善いには相違ない。精神的には幸に相違ない。併しながら自分に慾が在ればこそ乗せられるのである。致されるのである。だ

から餘り都合の好い談などに必ず耳を傾けるものではない。其れは大概恐ろしい陥穽である。此世には人を誘ひ、惑はし、陥れ、而して人の肉と靈とを合せ亡ぼさうとするものが到る處に附けねらうてゐる。人の長所からも、短所からも、好むところからも嫌うところからも、極めて巧みに這入つて來るものである。

天 分

私は曾て、自分の好むやうな事で生活の出来る仕事は先づ一寸在りさうにもないの
で、嫌いな事でも、性質に適せない事でも、致し方はない、堪忍して、勉強して、勤め
るより他にないと覺悟して取り懸つた事がある。けれども矢張り其れは結局無理であ
つた。而して自分自身に出来る事、少なくとも他人に頼らずに經營の出来る事でない
ば爲すものでないと云ふだけの事を、みじめに經驗したのである。

亂 賊 の 類

今や此世も漸く夜半を過ぎたであらう。けれども未だ曉までには間がある。各戸凶
器を備へて護らなければ盜賊の虞がある。のみならず内に暴亂の憂がある。兵備のゆ
るがせに出来ないのは誠に止むを得ない。

ただ暗夜を愛し、暗夜の長からんを欲し、暗夜に活動せんと思ふは即ち亂賊の心で
ある。之は同じく亂賊の類である。

人は寒冷にして不安なる暗夜の早く明けんことを心に願ひ、而して溫暖清明なる日
光の地を照さんを翹望すべきである。

神 風 連

既に半世紀も過ぎた事であるが、吾々は今猶屢々、明治の初め熊本に在つた神風連
の事を想ひ出す。程度に多少の差こそあれ、其精神思想に於て神風連と少しも違はな
い者は今の世に猶非常に多いやうである。之は浮華輕佻に對する反動には相違ないが
餘りに思慮に乏しき逆上である。祝すべき事ではない。與みすべき事ではない。

青年の平凡化

學校を卒業して、社會に出た多くの青年が、別に高い理想を懷くでもなく、唯平々凡々の生活を營むのを見る時に、如何にもなさけなく、また甚だ残念にも感ずる。青年の英氣を斯くまで消磨し去るものは、無論社會の大なる缺陷にも由るであらう。だが今の誤れる學校教育も亦其主たる原因に相違ないであらう。

吾々の希望は一に懸つて青年の上に在るのに、彼等が熱情も無く、向上の志も乏しく、所謂時代に順應したる如才なき好紳士と化しつゝ、あるのを見る時に、吾々は此國の前途を悲觀せざるを得ないではないか。

思案に餘る時

放棄して退かんか、飽くまで忍堪して死守せんか、右に行かうか、左に行かうか、どうしたら善いのか、何とも分別が付き兼ねる事がある。さう云ふ場合には何程考へても

自分一個の思案に餘るところから、友人の智慧を借りやうとする。而して友人の一言に力を得て漸く何れにか決心する。然るに後で思ふと、斯う云ふ場合に於ける友人の助言なるものも大抵宜しきを得ない。

抑々慾があればこそ迷ふのである。而して慾がある故に何處までも失敗が付きまとうて来る。己の私慾を棄てさへすれば、即ち勝手な慾望を去りさへすれば、直に最も適當なる決心がつく筈である。而して其れが何時も必ず安全なる道なのである。私は屢々斯う云ふ經驗を嘗めた。而して愚かにも後から顧みて、何時もさう悟るのである。

最上の寶

最上の寶は何であるかと問はるれば、私は猶豫なく、直に、其れは東西の經典及び古今聖賢の遺書であると答へる。其れは人間が遺した凡らゆる事業と藝術に勝つて、最も貴き、最も大なる物であらう。勿論中には不純の分子も混入して居やう、或は誤謬も在り、徹底せざるものも在り、亦偽物も在らう。總て之を讀む者は靈眼を要する。

併しながら今や吾々は餘りに此類の書籍を度外に附しては居ないか。陳腐とするのか、迂遠とするのか、或は全く無用の物とするのか、所謂敬して遠ざけるのか、兎に角餘りに興味を持たないやうである。故に熟讀玩味して、取るに委せられたる此等の貴き寶を、自己の物としやうとする者は甚だ少數者に限られる。

だが今は頗る多忙の世である。人に生活の餘裕が乏しいのである。偶々向上の志を懷き、懐仰の心を有する者も、緩づくり、心靜に、落ち々々と、自由に、此等の書籍に心を浸し、思ひを煉る暇などは何人も持ち合せないであらう。青年は學校の日課に、壯者は商店に、事務所に、役所に、工場に、捕はれて、追はれて、營々、兀々、年中世話しく暮さなければならぬ不幸なる秋である。

斯くして世は文明とか、文化とか、進歩とか、改造とか言ひながら、其實全く無修養、無教養、無信仰の者で充滿するに至るであらう。不幸なる世界である。吾々は今後、吾々に遺されたる世に最も貴き、大なる遺産に對し、冷淡でないやうに心懸ねばならぬ。而して何時も清新の心を以て學ばなければならぬ。

無 根 據

眞神を奉せず、眞信を持たないで、只自己の學識や、才覺や、手腕を頼むのみでは何人も到底碌な事が出來得る筈はないのである。其れは危いものである。怪しいものである。憐れなものである。要するに彼等には、根據が無いからである。人皆其れ相應に據るところが在るに相違なからう、併し宇宙の大磐石に立つて、永遠の目標を目的とするのでなければ、如何に大言壯語するも、如何に奔走馳驅するも、其れは空の空である。夢の夢である。無神、不信、而して自我の他何も無い者に何が出來やうぞ。畢竟するに人を過まり、世を毒し、生きて甲斐なく、爲して益なき一生を過すばかりである。而も傲然として自任自負するは世の自我者の常である。

人類進歩の遅々たるは

人類進歩の遅々たるは、人が過去の過失を改悟しないからである、而して過失も、

罪惡も、耻辱も、迷妄も、其れを其まゝ、幼弱なる子孫の頭腦に、心裡に、植え附けて相續せしめやうと強ゆるからである。而して子孫をして早くから正當の判断を下すことの出来ないやうに、内外から有らゆる手段を盡して、暗まして了ふからである。之は子孫が覺醒するのを恐れて、長く愚ならんことを希ふに等しいのである。此事は小學校や、中學校の教科書を開いて見ただけでも解る者には直ぐに解るであらう。

衰へたる哉

曾ては、此世の現状の全然天意に反し、人道に戻るものであり、之は人間の世界ではなく、惡魔の支配する處であることを痛切に感じ、之を叫んで、多少なりとも今の世に其罪を知らしむるの効ある事ならば、假令此身は溝壑に擲たれやうが、如何なる極刑に處されやうが敢て厭うところではないと思つた。

曾ては、深夜床を蹴つて起き、氷の如き冷水に沐浴して全身を清め、心眼を覺まして獨り一室に端坐し、在天の神を呼び奉り、祈りて曉に至りし事は、嚴冬中の常事であつた。

あつた。

今や省て甚だしく精神氣力共に衰へたるを覺ゆる。

誠拙和尚

昔鎌倉の圓覺寺に誠拙と云ふ和尚が居た。或時江戸は日本橋の富豪某の處へ行つて『今度山門の修理をしなければならぬので、少しばかり金を貰いに來ました、どうぞ之へ一ぱい入れて頂きたい』

と言つて頭駄袋を其處へ出した。すると其家の主人も直ぐには應じ兼ねたものと見へて『仰せは承はりました、併し其れはなか／＼大金の事ですから暫く考へさせて頂きます』

と答へたさうである。すると、和尚は

『それなら宜しく御頼み申す』

と言つて、其袋を預けて鎌倉へ歸つて了つた。

幾月か過ぎて日本橋の富豪が圓覺寺へやつて来て、兼て預つて居た頭駄袋に何百兩かの金を入れて、誠拙和尚の前へ出したさうである。ところが和尚は一向平氣で、格別其れに頓着もしないやうな風に見へたので、富豪も心の中で少し張合抜けがしたのか、

『實は先日折角の御依頼でしたから、漸く金を拵へて今日態々持参した次第で御座います、然るに御苦勞であつたぐらひの一言も言つて下さらないのは些とひどいではありませんか』

と、愚痴を言つたさうである。誠拙和尚は其れを聽いて、

『馬鹿な事を言ひなさるな、自分で徳を積んで置いて、人に禮を言はせると云ふものが在るか』

と言つて、笑つたさうである。

勝海舟先生を訪問せる者の談 一

私の舊友の氏がM氏とY氏と三人連れで、一日氷川に勝海舟先生を訪ふた時の談が面白い。一同が先生の室へ通ふされて座に着くと、直ぐにM氏は例の調子で

『先生ぐらひ世故に慣れましたら定めし未來の事も達觀が出来ませうね』
とやつたさうである。此人は宗教家を以て自ら任じて居ながら、豪傑氣取りと云ふ者が往々人を馬鹿にする癖が在る。

海舟先生はM氏の言が終るや否や

『未來が解れば勝伯ではない、勝大明神だ』

と大喝されたさうである。

Y氏はまた讀書子であるから色々小六かしい議論でも仕掛けたのであらう、先生は『お前は剃刀、乃父は正宗だ』

と言つて笑はれたさうである。蓋しY氏の親父と云ふのは、海舟先生が維新前後を通じて第一等の卓識家と推服してゐた人である。

勝海舟先生を訪問した者の談 二

また別の知人が矢張り二三人連れ達つて、氷川へ行つた時の談に、海舟先生は

『私にはどうも基督は解らん、孔子ぐらいだと解るけれどもね』

と言はれたさうである。知人は其れを聽いて、自分達が容易に基督を理解し得るとする心持を戒めたものと思つたさうである。

海舟先生は又

『○中は迷信の巢窟だよ、ア、云ふ處から君等に對する迫害も起るだらうよ』
と言はれたさうである。

勝海舟先生を訪問した者の談 三

岩如雲子が先生を訪ふて、白痴教育研究のため渡米する者の談をしたところ、先生は其れを軽く聽き流して、

『世間の者は皆白痴ではないか』

と言つて笑はれたさうである。之は無論出放題の滑稽とばかりは言はれまい。氷川の

陋屋に蟄居して居ながら、深く世の様を慨し、日夜心を碎き、力を盡して、老を知らざる者の如くであつた此人の目には實際さうも見へたであらう、無量の感慨が言外に聞こへるではないか。

また或時

『どうせ愛國者達が寄つて、たかつて國をつぶして了ふのさ』

と言つて、歎息して居られたさうである。私は折にふれては此談を思ひ出す。偏狹なる愛國者や、固陋なる軍人や、屑々たる俗吏の輩が動もすると國家を苦境に導く憂ひは何時も在るではないか。常に絶へないではないか。

國運を賭するの事

最早世人は大抵忘れたであらうが、數年前に米國からヤツブ島の統治に關し、吾に異議を申込んで來た事がある。其時直に躍起となつて騒ぎ出した連中の中にも、大學教授某などは最も元氣な方であつた。

「一步も吾主張を譲るなかれ、一步を譲れば更に十歩を譲り、又百歩を譲らなければならなくなる、此膝一度屈すれば又立つ能はざるに至らむ」と力み、

『米國が吾を並吞せんと欲するの野心は歴々たるものがある』
と言ひ、

『今や我國は勝敗を顧みず、國家の存亡を賭しても戦ふの覺悟を要す』

とまで叫んだものである。(當時の東京朝日新聞參照)

之が市井の不頼漢の口から出た無責任なる一時の放言ならば兎に角、堂々たる知名の士の正論公議として新聞紙上に掲載されたものである。幸に此事件は大事に至らな
いで解決を告げたが、國運を賭する程の大事事件も、其初めは談笑の間に決し得らるべ
き些細の事に對し、少數過激家の狂的煽動に基因して起ることを思はせられた。實に
國民は何時どんな詰らぬ事で、思ひ設けぬ災難に導かれるか分らないものである。

遠雷のやうな響きを聞いて

此頃毎日のやうに海の方から地響きのするやうな音が轟いて來た。其れは恰も遠雷
のやうで、而も朝から晩まで續いて聞こえた。沖の方で軍艦が演習をしてゐるのか、
或は實彈射撃を試みてゐるのであらう。さう思ふと、遠雷を聞くやうに一種壯快なも
のではなく、人類の破滅を告げるやうな感じが起る。

一たい軍備は全く相手が無くては目的の無い事になる。其れでは存在の理由が餘り
に漠然であり、薄弱であり、且張合も無いものと見へて、軍人は必ず無理にも假想の
敵を拵へるやうである。而して其れに對抗する積りで、平生用意をしてゐなければ危
険であるとする。而して國民もやがて其氣になる。

若し假想の敵國に對して確に打ち勝ち得べき目算が立たないまでも、どうやら相手
に成れさうな準備が出来上ると、今度は大人しくしてばかりは居れなく成るものと見
へる。機會があれば一つやつて見たいと云ふ氣になるらしい。而して何か口實になる
やうな事が起ると、先づ愛國者達が待ち構へてゐたやうに騒ぎ出す。臥薪嘗膽だとか
國辱を雪ぐは此時であるとか、永遠の平和のためだとか、正義人道のために膺懲しな

ければならぬとか言つて逆上する。而して皆誰の言ふことも聞かないやうに成つて了ふ。

元來戦争と云ふ事は、人間が悪靈につかれて其ために驅使されるのである。其れを知らないで、人間同志の大耻辱とも、大罪惡とも思はないのみならず、後々までも紀念などを定めて、毎年其記憶を新に呼び起し、何にも知らない子孫にまで聞かせて覺へさせて、傳へて置かうとするのは、抑も何のためであるのか。

之はどうしても戦争を面白い事と思ひ込んで居るばかりでなく、國家的大盛事であり、國民的大名譽とでも心得て居るに相違ない。而して口には世界の平和とか、人類の幸福とか云々して、好戰國民と言はるゝのを打ち消さうとする。だが斯の如き笑止の事は日本ばかりではない。今や何處の國でも殆んど同様である。偽善、偽文明此上もない談である。何と加して斯る無知な、野蠻な眞似を一日も早く此地上より一掃し去らなければならぬではないか。

斯ふ云ふ事を言ふと、自分達ばかり眞正の愛國者であると思つてゐる連中からは直

ぐに危険人物視されるかも知れない。因つて左に明治天皇の御歌を一首誌す。

四方の海みなはらからと思ふ世になど波風はたちさはぐらむ

以上は要するに、今日直に軍備を撤廢せよとも、其演習が無用であるとも云ふのではないのは勿論の事である。只人類相殺戮する事の止むのは果して何の時であらうかと悲しむのである。

盲 人

『盲人衆盲を導く』とは現今の實狀である。心の盲なるは自ら心を閉ぢて開かないからである。其らは閉ぢられて、閉ぢて了つて、自分ながら氣も附かなく成つて居るのである。故に他から注意されても決して開かうとはしない。而して却つて怒り、惡みて其れを斥けて了ふ、殘念な事である。盲人は光明を求めやうとはしない。而して暗黒を暗黒とも思はないのである。盲人は前方を見やうとするよりも寧ろ過去に執着する即ち最も歴史を重んずる。而して紀念日、紀念會、紀念碑、追悼會等皆彼等の好むと

ころである。『後を顧るは宜しからず』と云ふ聖訓と同じやうな意味の教訓は吾等の東洋にもある。『日に新にし、日々に新にし、又日に新にすべし』と云ふのである。吾等は皆此語を知らないことはない、だが之を履行しなければ知らないと同じ事である。盲人は辯を好む。而して能く諫を防ぐ。盲人は自ら義とする。而して謙讓を卑屈と思ふ。謙は徳に入るの初であり、徳の基であることを知らない。盲人は自ら大なりとする。而して他を侮るを好む。敬と禮とを無視するのである。盲人は人を教ゆるを好む。而して自ら反省するを厭ふ。盲人は人の上に立つ事を善なりとする。而して人のために犠牲となるを欲しない。盲人は富貴と榮達とを以て人生の目的と思惟する。而して私慾私心を除かうとはしない。盲人は憤怒を以て悪なりとしない。而して他を尤むるを以て勇なりとする。盲人は頑固である。而して溫柔なる者のみ天命を受くるを知らない。盲人は狹隘である。故に己の心に叶はざれば益友をも敵視する。盲人は自己を愛して、己の悪むべきを知らない。盲人は自ら責むるの勇なく、而して輕々しく他を責むる。盲人は争鬪を惡まない。而して口には平和を云々する。盲人は始終正義の

味方であると言ふ。而して最も不公平の見を固執する。盲人も類を以て集まる。而して天に逆はんと企つる。盲人も才知ある者はご世を毒する。狂者の利刀を弄するやうなものである。盲人は血氣にはやる。而して他を煽動するを好む。或は國を誤り、累を後昆に遺す。盲人も能く政治を談じ、風教を慨し、或は宗教を説く。而して具眼者を以て自ら居り、愛國者を以て獨自ら任ずる。詮じ來れば誰か盲人ならざらんやである。眼疾ある者は皆光明を忌む。故に勉めて天の光明を求め、靈眼の明ならんことを祈るべきである。

『基督の模倣』

此本に付ては私は青年の時から友人達の談に聞いてゐた。而して私も一部の英譯を求めて、字引をたよりに繰り返し愛讀したものである。ところが一日先輩某氏が、『君のやうな陰鬱性の者は寧ろあゝ云ふ書物に親しまない方がよいだらう』と注意して呉れた。私も左もあらうかと思つたので、其本を友人にやつて了つた。

其後十年も立つてから又切りに此本を思ひ出して讀みたくなつた。それで更に求めて、世話しい間にも電車の中などで讀んでゐた。其れも或人が渡米する時に錢別としてやつて了つた。

又十年も過ぎてから不圖此本がほしく成つたので、又々買つて來た。此本は私の性に合つてゐるものとても云ふのだらうか、今猶靜なる秋の夜など折々に取り出しては之を見る。而して私は此上もない貴き利益を受けるのである。去りながら之は中世紀のものである、従つて隱遁的色彩は濃厚である。今は黑暗々の世であるが、鶏鳴に曉天の近きを思はしむるの時である。自然吾等の感覺も異るところがなければならぬ。

ケーベル先生

先年ケーベル先生は、二十餘年の長い間住み慣れた日本を去つて獨逸へ歸られることになつた時、既に船室まで取つて置かれたのであるが、圖らずも大戰勃發のため、歸る事が出来なくなつた。それで餘儀なく出發を中止して、暫く横濱の知人（露國總

領事)の處に滞在して、戦争の鎮まるのを待たれる事になつた。

其間にポツ／＼書かれたものが集められて、先生の貴い原文と、K氏の忠實なる其翻譯とが相前後して出版になつたのである。

若し大戦争が起らなかつたならば、二十年餘も日本に居ながら、日光へも、京都へも、一度も行つて見やうともしなかつた先生は、横濱から船に乗つてサツサと故國へ歸つて了はれるところであつた。而して極く少數の親炙した者達の他に餘り交りも無かつた先生は、大學の教室で學生に對して講義された以外に何等の發表もしないで、悠々然、不平もなく、失望もせず、(初から餘り多く望みを屬して居られなかつたから)相變らず莞爾として日本を去られたであらう。

四年も續いた大戦亂も漸く濟んだ時、先生は憧れる故國へ向つて愈々横濱を立たれる事になつた。私は今度こそ先生と地上に於て相見る最後であらうと思ひ、一夕晚餐を頂きながら、先生とK氏と三人で心ゆくばかり語り暮した。

然るに又詰らぬ故障が在つて再度出發を見合はされる事になつた。其後獨逸に在る

先生の舊友達からは、荒廢と混亂の獨逸の現状を見るに忍びない、と云ふ手紙が來たさうである。それで先生も無期限に出發を延ばして横濱に滯留される事になつたのである。

先生の平生は極めて靜な、隱者的生活とも云ふべきものであつた。けれども先生は一日と雖も懶惰に、退屈な日を送られるやうな事はなかつたのである。引續いて書かれたものは、前の續篇として、K氏が又苦心勉強して其れを立派に翻譯して、何れも出版になつたのである。

斯う云ふ風に意外なる事が起つては、先生の出發を引留めしめた爲に、吾々にとつて近頃有益なる善い書物が此處に遺されたのである。而して先生はとうとう骨を此國に埋めて彼界へ逝かれたのである。

あゝ精神的勇者、俗塵を超脱せる高士、吾等の先驅者、學殖深くして、而も信仰篤く、品格あくまで高くして、聰明溫良、斯の如き眞君子は今や何れの國に於ても又容易に見られるものではあるまい。

KH氏の懷舊談

曾て東京辯護士協會の會頭をして居たKH氏は仙臺の人である。先年氏の祖父に當る人の碑が金華山附近の或島に立てられたに付て、氏が其處へ行つて來た時の談である。

KH氏の祖父なる人は維新前の事であるが、七日ばかりの間家族にも何も言はないで只獨奥の一室に引籠つて、切りに何か書いて居られたが、やがて其書き物を持つて態々江戸へ上つて行つたさうである。幾日か立つと意外にも今度は唐丸籠（罪人を送るに用ゆる金網を張つた籠）に乗せられて仙臺へ送られて來たさうである。而して直に其島へ流罪の身となつたのである。お祖父さんが流されると、一家は島の對岸の漁村に引移つて、而してKH氏のお父さんは降つても照つても毎日必ず何かお祖父さんの口に適する物を調理しては、自分で小舟を漕で島へ持つて行かれるのである。KH氏はお父さんの爲る事を見て、子供心にも感心したさうである。だがお父さんは常に『父

親が老親（即ちKH氏の曾祖父）に對して事へられた其日常の孝行を思ふと、自分などは逆も思はない』と言つて居られたさうである。

私は此談を聽いて、古武士の立派なる家庭の様を想像して深く感心した。而して廢れ行く孝道に付て考さへせられた。

自 殺 者

我國の自殺者は年々一萬人を越ゆると云ふ。何んと云ふ悲惨な事であるか、何んと云ふ夥しい數であるか。

役人は、其内發狂者が何人、失戀が何人、生活難が何人、其他何が何人と統計を作つて、各國の其れと對照表を作製する。只其れだけである。

若し一人々々に就き、思ひ詰めて死を決するに至るまでの事情を質せば、必ず尤むべき者ばかりではあるまい。深く同情を寄すべき理由ある者も少くないであらう。

吾々は同胞の多數が年々斯の如く悲惨なる最後を遂げつゝあるに對し、之を以て單

に其人の不運となし、自業自得の因果となし、別に社會全體の責任として深く考慮しなければならぬと思はないのである。

何處に自由がある

何處に自由がある。不義と無知とは權力と暴力とを以て人間を壓倒しやうとするではないか。

若し侃々諤々の士が在れば、直に非愛國者、危險人物、或は不敬漢と誣ゆるではないか。而して迫害を加ふるではないか。

何處に自由がある。私慾と俗情とは天下を支配してゐるではないか。若し清廉剛直の士が在れば身を置く處に窮するであらう。何處に人間の自由がある。

老、 莊

老子、莊子は私も年壯の頃に隨分繰り返して愛讀し、また耽讀したものである。特

に莊子の取り留めない空漠夢幻の説に誘はれて歸着する處も知らず、而も自ら高しとなし、深しとなして、愚かにも得意になつてゐたのである。偶々一明哲の老莊に對する嚴正假借なき辨妄の論文を見て、初めて長夜の夢を破られ、漸く魔窟を離脱する氣になつたのである。

今は老、莊に惑はされる者は餘り無いであらう。故に管々しく其辨妄論を掲ぐる要は無いであらう。

共に溺れんとす

水に溺れんとする者を救はんとして、屢々水泳の心得ある者でも共に溺れる事がある。丁度其やうに、妻なる者が此世の虚榮に執着して、どうしても精神的向上を見られないために、常に教へ、諭して、心を碎きながら猶失望もしないで忍堪する者を見る時に、私は切なる其苦衷に對して深い同情を寄せざるを得ない。

それと同く、男子が俗世の名利に没頭して、改むるを知らないために、妻なる者が

折角求道の志を懷きながら、断えず見へざるの壓迫と重荷の下に在つて、遂に其精神を伸ばすことも、心を開くことも叶はず、齷齪として可惜月日を送つてゐるのを見る時に、私は不幸なる妻女のために甚深の同情を禁じ得ない。

靈に於て目覺むる時

人々が靈に於て目覺むる時、初めて世上の萬事は取るにも足らぬ兒戯である事を知るであらう。然らざる限り、口を酸くし筆を秃にして辯じたからとて到底之を理解するものではない。

人の靈を其深い睡りから呼び覺ます事が他人に出来るものか。之は容易でない。極めて難事である。若し大聲を出したり、揺り動かすやうな事をすれば皆怒つて了う。他人は手の着けやうがない。只心に祈つて、靜に時を待つより他ないものか。

一日も早く打破すべきもの

嗚呼教育の弊、學校の弊、詰め込主義の弊、之は今日の有ゆる弊害の本であらう。世の父兄は、子弟が如何に馬鹿々々しき學科に日々追ひ回はされて、どんなに苦しんでゐるかを知つて居るのか。可惜大切なる歳月を只試験のために、試験が済めば大概忘れて了うものを、無益に、心要も無い事を、日々多量に詰め込まなければならぬやうに餘義なくされて居るのは何んと云ふ馬鹿げた事であるか。曾ては支那の科擧を笑つた事もあるが、今の吾は其れどころではない。一つたい斯うして人の子の教育が出来るか誰が思ふのか。凡そ國家の大害を爲すもの今の教育制度の如き甚だしきものは無いであらう。之は一日も早く打破すべきもの、改革しなければならぬものである。

今日の教育

假令如何に必要にして大切なる學課でも、若し反復玩味する餘裕を興えないで、只むやみに詰め込まうとするのは甚だしき愚な事でないか。それは徒に頭腦を過勞せし

むるばかりで何の益なきのみならず、健全なる常識の發達を阻害して了う虞れがある。また教ゆる者も、それを監督する者も皆同じやうに詰め込主義の學校を出て來た者で、口先きは兎に角、何れも立身出世を標準とし、一生の目的として生活する徒である。どうして人の教育が出來やうぞ。

要するに國家の大なる組織を以つて完全に子弟の徳性を破壊せんとして居るのである。根本的誤謬を正さうとはしないで、徒に義務教育の年限延長をのみ計るは、寧ろ寒心に堪えない事柄である。

富者の不幸

天下に一人の其の處を得ざる者があるならば、衷心安んずることの出來ないのが人情である。即ち之れ良心の感動である。

然るに此世の富者は自己の富めるを以て當然の結果なりとすると同時に、他人の困窮をも亦一概に自業自得の事として更に相關せない。優者として他に驕るの心はある

も、別に忍ぶ能はざるの責任を感じることもない。之即ち其良心が既に半ば心外に退去せるに因るのである。之は富者自ら知らざるの大不幸事である。寔に『富める者の天國に入るは難い哉』と云ふものである。

世人の念とするところ

世人の念とするところは只自己の利害のみである。而して常に心世話しく他に先んじ、人に越えんとばかり焦つてゐる。畫策行動悉く得失の外に出ないのである。其高等なる者は國威と云ひ、國利と號し、好んで公事を云爲する。けれども必ず自國の利害を出ないのである。己あるを知つて他を顧みないのは同一である。自我者は必ず卑怯であり、必ず偏狭である。表面剛強のやうにして、内心常に不安の感を免れないのである。他を壓して勝たなければ己立ち難しと危ぶむものである。之は猛獸毒蛇の類である。人の徳なく、人の情なく、正に天意に背反する亂賊の類である。未だ天地の公道を明にせず、私心私慾を混へて義となし、道と呼ぶ者の言動は、其高等なる者程、

人を害し、世を毒し、遂には國を亡ぼすに至るものである。

科學者に對する一希望

科學者は從來の宗教に附隨する迷信邪見を打破すると同時に、其分を越え脱線して人の貴き眞信をも併せ奪はんと試むるに至らば、雷に功罪相償はないばかりではない故に科學者たるものは己の學ぶところ知るところのものが、宇宙の廣大無邊なること、濫奧極りなき眞理とに比し、猶如何に憐れむべきものであるかを深き省み、必ず輕卒なる獨斷と、淺薄なる僻見に陥らぬやうよく謹慎の態度を持すべきであらう。

途上見るに堪えざるもの

馱馬が重荷を牽くに惱める時、人は殘酷にも猶之れを鞭打つて無理なる努力を此無言の兄弟に強ゆるのである。之れ途上常に見る人間の惡事である。聞く外國産の溫順なる良馬も一度輸入して邦人の手に飼養せしむるや、大抵は其性質變化して荒々しく

且つ意地悪きものに成り終ると。馬も亦欺くべからざる人の心の鏡である。

二

雪降り積みて野も山も滿目皚々たる時に、何事ぞ子供等と打ち混りて親達までも出でて物蔭に寄り添ひ、今や餓えて食をあさる可憐の小鳥を欺き、畏を以て巧に之れを捕へんと窺ひつゝあるとは。之れは北歐の子供等がクリスマス近き頃より積雪の爲めに餌に餓えんとする小鳥に優しき同情を寄せて或はパン粉を窓外に撒きて與へ、或は麥の穂を竿頭に立て、之れを啄むに任するなどと對照して何んたる相違であるかと淺間しく感せずには居られない。

三

分別あるべき年にも似ず、獲物を袋にし獵銃を肩にして揚々行く者を見る、其無慈悲にして殺を嗜むの蠻風を耻とせざる有様は、心ある者をして蟹螯せしむるではないか。

不 平 等

如何なれば人は人の上に立たんと欲するのであるか。他を凌いで已獨り人に先んせんと欲するのであるか。之れ現代に遺存する最も卑しむべく、最も惡むべき舊惡弊習である。而も古來深く人心に浸染して今や其不義不善なる事さへ忘れ果つるに至つたものである。人は何人に對しても苟も輕侮の念を懷くやうな事があつては人たるの道に反する。驕傲の態度を持して人に臨むやうな事があつては濟むものではない。假令僕婢と雖も實に之れ吾等と全然平等なる人ではないか。屈する者は起たしめ、傷める者は包み、疲れたる者は休ませ、足らざる者は補ふべきである。之れは人情である。即ち人道である。説明の要なく、議論の餘地はない。人若し良心の聲に心耳を傾くれば、直に自明の理であることを覺るに困難は無い筈である。

人を輕侮する事は即ち其人格を蹂躪する事である。即ち其靈性を毀損する事である。兄弟を足下に蹂躪し、其人格を傷けて何の善い事があらうぞ。之れ其人に對して宜しからざるのみではない、罪を天に得る者である。

併しながら特に幾多人爲的の階級を制定し、公然人に上下の差別を示しながら、世

人をして本来平等の觀念を徹底覺悟せしめんとするは極めて柔盾無理なる期待と言はねばならない。

私は此に於て深く治道の行はれ難きを思はざるを得ない。

久しぶりに基督教會へ出席して

東京の或大きな基督教會に一派の大會があるので、全國から其派に屬する教役者達が集つて來て居る噂を聞いた。そこで私は久しぶりに二三舊友にも會ふことが出來やうかと思つて翌日其教會へ行つて見た。其日は丁度日曜日である、昔し同窓の友であつた某が演壇に立つて堂々と説教祈禱をした其後で、某老牧師が立つて

『今回來朝されましたドクトル……が今晚此處で演説致します。ドクトルはニウヨルクに於て有名なる雄辯家であります。其他某氏と某氏も話されますから皆さん誘ひ合つて來會されんことを希望致します』

と述べて退いた。私はそれを聞いて何んだか寄席の口上言ひのやうに感じた。特に『有名なる雄辯家』であるから聞きに來いと云ふのは甚だ異様に感じた。一派の先輩とも仰がるゝ人が斯う云ふ調子であるから基督教會の振はないのは極めて當然の事であると思つた。

俗 累

今や假令非常なる人が在つて、どんなに理を盡し、情を盡して道を説かうが、叫ぶうが、どれ程長い間忍堪して教へやうが、論さうが、道を聽いて眞面目に戰つて、一歩たりとも此世を出て、狭門を選び、難路を進まんと努むる者は容易に見出し得らるゝものではない。

故に他と共に流下し、同く無意味の生活に甘んずることを欲せず、慎み學んで斯道を明にせんと願ふ者は、人知れず非尋常なる憤發と、不屈不撓なる忍堪を要するは無論の事である。

併しながら積年の勞苦も省れば舊態依然として改まらず、従つて亦何等世を益する

事も出来ない己の臍甲斐無さを思ふ時、殆んど失望することもあらう。

時には獨り此世の俗塵到らざる處に退いて、心ゆくばかり聖經にも親み、思ふ存分に祈を捧げ、亦冥想工夫を凝すことが出来たならばと、心に願ふこともあらう。

けれども若し吾々は俗世に接觸する煩ひもなく、修道院内の道士のやうな生活を續けてゐたならば、其處には外界よりの刺戟が少なく、自然、心に弛緩を來たすであらう。而して憤拔躍進の機會が更になくなるであらう。吾々は冥想に耽つたり、讀書に没頭するばかりでは必ず徳に進むことの出来るものではない。

吾々は日々の勤勞に服し、自分に屬する重荷を負擔しつゝ、献我の道を實際に實踐しなければならぬのである。故に俗累の煩は勿論求めて迎ふべきではないが、敢て厭ふて避くべきものでもない。

選挙の競争

私は政黨政派に興味を持つたことはない、亦彼等に何等の期待を持つた事もない。

元來人が黨を立て派を結んで相争ふと云ふのは善くない事と思つてゐるからである。

曾ては選挙權を有してゐたこともあつたが。未だ何れの黨派に屬する人へも投票したことはない。さう云ふ譯で自然政談演説と云ふものを聞いたこともない。

ところが先頃私の住む地方に補缺選挙と云ふ事が行はれた。すると二つの黨派から一名づゝの候補者を立て、各町村に亘つて有らゆる方法を講じ、激烈なる競争を始めた。此田舎町の小さな劇場でも前後三回相方の演説會が開かれた。何れも東京の本部から選り抜きの辯士を應援に送つてゐるのである。斯う云ふ場合に彼等はどんなことを言ふものか一寸聽いて見やうと思つた。亦其名ばかり聞いてゐるが未だ見たことのない知名の代議士を見やうと思つた。それで二晩續けて演説を聴きに行つたのである。辯士は皆所謂辯論の雄とも云ふべき人々である。だから談はなかく達者なもののばかりであつた。但し切りに自黨の功績ばかり列べ立ると共に、頗る皮肉な言語を弄して反對黨を攻撃する。それは甚だ聴き苦しいものと思つた。特に聴衆に媚び、選挙人の意を迎へやうと努める態度の如きは最も卑しく思はれた。

要するに町村會議員でも、府縣會議員でも、選舉と云へば全國大抵の處で必ず相當に競争が行はれるであらう。而して津々浦々に至るまで、多少なりとも其處に溫良の美風が残つてゐるならば、やがて遺憾なく一掃し去つて了うに相違ないと思つた。

偶

感

二首

途中偶ま感ずるまゝに五言二首を作る、固より平仄押韻に頓着しない。

驅^ツ民^ヲ競^{ハシ}名利^ヲ

謙讓委^ス拂^フ地^ヲ

政教失^ヒ其道^ヲ

所^レ歸^{スル}夫何^レ處^ニ

天下概^ス兒戲

禍亂何^ノ時^ニ定^ム

靜觀^ス大勢^ノ移^ル

恐懼待^ツ明旦^ニ

眞劍なる主張

或人詰つて曰く、君は只徒に世事を罵倒するを以て快とするやうに見えるが、何か積極的に眞劍に主張する事が在るのか。と

答へて曰く、自分は何も辯を好む者ではない。大抵止むを得ずして言ふ積りである。

故に勿論命懸けで言はなければならぬ事が在る。其れは即ち自分の生命を以て保證しなければならぬ事であり、主張しなければならぬ事である。其れは、吾々人間たる者は何を措いても先づ第一に人の道を徹底的に學ばなければ何もかも此世の中の事は總て駄目であると云ふ事である。之を忽ちにしては國家の安寧も、世界の平和も、人類の幸福も、千年立つても、萬年立つても、萬々年立つても決して來る時はない。而して只人類は永久に苦惱に苦惱を重ねるばかりであると云ふ事である。今や吾々は他に勝つ事、他に先んずる事、他よりも富む事、他を制せんとする事ばかり教へられて、

勵まされて、其氣に成つて、勉強して、奮闘して、日を暮し、一生を過ごしてゐるのである。其れは全然人の道に反する。其れは誤謬であり、心得違ひであり、愚であり、罪惡の本であり、禍亂の始めであると云ふ事である。古來の聖賢は皆斯く吾々に教へて居るのである。然るに今や全世界に漲る惡勢邪力に押し流されて、吾々も正直なる心の判斷力さへ奪はれて了はんとするのである。此の如くにして省みる事を爲さず、改むる事を知らないならば、人間の價値は零であり、人類の前途は絶望であると云ふ事である。之は自分が靈魂の底から出來得る限りの大聲をしぼつて叫ばなければならぬ事である。自分が猶一日の食を與えられ、一日の生を此地に保つ限り、繰り返し、又繰り返し、吾同胞に告げなければならぬ事である。ただ恨む、如何に叫べばとて大概馬の耳に念佛で、人の心に入り難い事である。之は自然界に瀾漫する滑稽の氣なる者が人心を支配してゐるからである。其れが人を笑はせて眞面目に考へさせないのである。之を知つて之を斥けなければ終生道を聽く事も出來るものでない。

日曜學校

私の家の子供等の爲めに教會の日曜學校へ行くことを良くないと思つてゐる。だから成るだけ行かせないやうに注意してゐるが、それでも子供等は度々人から誘はれて出席したことがある。其處では尋常二三年の子供等を捕へて相變らず可なりに牽強附會なる固陋なお談議を聽かせたり、聖書を讀ませたり、亦如何にも滑稽であると思はれるやうな祈禱を子供等の前でする。

新約の中で特に基督の言行を載する四福音書は至上無比の貴い記録と云ふべきものであらう。それはお嘶談を喜ぶ程度の子供等に對して容易に講すべきものではない。亦祈禱は神聖な事である。猥に勝手な慾を並べ立て神を呼ぶは不謹慎も甚しい事であらう、それは即ち冒瀆と云ふものではないか。

どうしてア、云ふ無理解な事が今日續けられて居るものか、どうして何時までも改めることを考えないものか、之れも不審に堪えない事の一つである。

宗教と科學

科學開けて固陋なる迷信と牽強附會なる傳説を打破すると同時に清明なる眞信をも並せて人間より一掃し去らんとする。

今猶世に科學と宗教との衝突を云々する者もあるが、眞正なる宗教と云ふものは正確なる科學と苟くも衝突なぞすべき筈のものではない。宗教と云ふものは元來そんなものではない。眞正なる宗教を知らない科學者が、舊い經典中から採るに足らざる傳説や、狹隘固陋なる一宗派の信條や、教徒の偏見に對する反感より、淺薄にも宗教と科學の衝突などと呼號するのは笑止の沙汰と言はねばならぬ。

草庵の空氣

私が獨で草庵に起臥して居た時に尋ねて來た一友人が、後に人に語つて

『前にNがアノ草庵に獨で居た時は行つて見ると心持が好かつた』

と言ふたさうである。思ふに其後私の家族が草庵に一緒に住むことに成つてから、其友人は偶ま來ても曾て感じたやうな興味が無かつたものと見える。

それは私が獨居た時とは違つて、假令自分の家族であつても幾人かの者が集れば草庵の空氣も勢い動搖せざるを得ない。其處には外面の平隱無事なるに似ず精神上には必ず可なりの混亂が起らざるを得ないからである。それは私の家族の中に特に邪なる者が在る譯ではなく、總じて世の女性方面から常に襲來する所謂女惡なるものが執念にも女に附纏ふものである。而してそれが私の妻子を通し草庵に浸入して來て直に私の心の中にまで忍び込もうとする。それ故そこに不斷の緊張が生じ時には猛然たる反撃も餘議なくされることが珍くないからである。

平生出入する者も稀なる山村の草庵も、客に平和清明の快感を與ふることの出來ないのは今の世に於て免れ難い不幸である。

理想高きに過ぐ

教養ある一人の友が、曾て眞面目に私に對して

『あなたは理想が高過ぎます』

と言つて呉れた事がある。それは他に對して全きを望み或は嚴に失することを戒めて呉れたものと解する。時を待つと云ふ事、急激にすべきでない事、それは肝要事である。けれども吾々は『神の全きが如く全くなるべし』と教えられてゐる。吾々は自ら限ることなく日々に新に進まなければならぬ。理想は常に前方にあつて限りなく遠大崇高でなければならぬ。吾々は兎角自ら是とし自ら義とするの傾きがある。吾々は平生理想の高くないことをこそ痛く反省して警むべきである。

人が此世に屬する間は如何に高くとも其の理想とするところのものも知るべしである。故に世の智者や君子や必ず大事を爲すに足らない。眞正なる革新の大業には彼れ等も亦與るを得ないのである。

他に對して輕悔の念を起す時

俗世に埋没して醜なりともせざる者や、驕傲にして自ら恃む者を見る時に吾々は動もすると心に輕悔の念を起すことがある。

翻つて思ふ、若しそれ等の人をして吾々が受けたやうな道を聽くの機會を持たしめたならば、夙に吾々よりも遙に其徳を高くして居たかも知れない。

未來に於てもそれ等の人が一且覺醒するの機會を得て憤發すれば、吾々よりもどれ程優つて神の御心に叶ふ者と成るかも知れない。

故に假令如何なる人を見ても心の中に決して之れを輕悔してはならないものと深く戒むべきである。

無能にして世に爲すなきを悲む時

一能なくして空く徒食するのは無論濟まない事である。併しながら若し自ら己を潔うするに勉め、他をして多少なりとも反省するところあらしめ、一步たりとも神に向つて近づかしむる爲めに精神的助力を與うる事が出来れば世に用ありと云ふべきであ

らう。

自ら全く世に益なき者の如くに思ふて偶ま失望せんとするものも亦悪魔が人の信乏きに乗じてする悪戯に由るのであらう。

悪魔は又苦笑しつゝ低聲に言ふ

『己惚れ者よ汝は多年最も親く交る者の爲めにさへ何等見るべき影響を與え得ないではないか』

と。私は更に

『古の聖賢と雖も精神的に特に深い縁故ある者でなければ如何ともすることは出来なかつたのである。世にはどうしても救はれない者もある』と答へて魔を退けた。

祈

嗟神よ吾心は恩寵の豊なるに狎れて平然無感覺となり、謙虚百順の童心を失ひ漸く驕慢に傾くの虞れあり、希くは猶此上に餘り大なる恩寵を下し玉はされ。

無用の偏物

誠に道を學んで而して身を以て廣く之れを實地に履行せんと欲するの志を懷きながら、其言は聽く者なく、其事は遂るに由なく、此世に於ては全く無用無益の者として一生を終る者もある。私は他人に知られない隠れたる其努力を大いに珍重する。而してそれは決して無意味の生活とは思はれない。地上に於ては假令四方に拒まるゝも寸毫も其志を移さず、身には一錢の貯も有することなく、弊衣を纏ふて更に意に介さるものゝ如く、勇躍して獨り天路を辿り行くやうな人を見る時に私は覺えず『ア、偉なる哉』

と讚歎せざるを得ない。

之等の人が此世の逆境に處して鍛冶修得したるところのものは、地上に於て遂に用ゆる機會が無かつたとしても、其れは他日他界に於て大いに神の公事に役立つであらう。否必ず役立つに相違ないのである。只永遠の事を知らない暗世に屬する短見者のみが斯る人を指して無用の偏物と笑ふのである。

基督教徒に何を期待し得るか

基督教徒は世に於て最も高い使命を帯て居る者である。何ぞ直言直行其教を確守遵奉することを敢てし得ないで、俗世と苟合妥協するのか。彼等基督教徒なる者は此世の根本的改革者であらねばならぬ。

彼等は徒に『御國を來らせ玉へ』と口頭に繰り返すばかりではないか。偽りなく之を願ひ、身に體して之を祈らうとはしないでないか。

其教會は俗世間と全然違つた清い處でなければならぬ。然るに教會の内部は何處に此世と異つたところがあるのか。基督の從者等が集會する處は天國に似た處であらねばならぬ。然るに實際は其正反對でないか。故に眞面目に基督の教を學ばんと志す者は彼等の間に居るに堪えない。而して自然に教會外に去つて了ふと云ふのも止むを得ないではないか。嚴に評すれば今の教會は偽教會である。今の信者は偽信者である。

彼等に向つて此世を恐れないで、此世と苟合妥協しないで、此世に屬さないで、却つて此世に打ち勝たねばならぬと云ふ基督の旨を以て望むは抑も無理な註文であらう。基督の教會が斯んな風に成つて了つたのは全世界を通じてある。彼れ等に對して最早何等の期待も出來ない。

蒔いた種子

四年に亙つて全世界を騒がした歴史上未曾有の大戦亂も、其元を質せば塞爾維の一年青年に由つて火を點せられた爲めではないか。熱情餘りあつて思慮乏しき者が一人でもあれば、思ひ懸けない世界の難さへ引き起すものである。況んや今さう云ふ種類の者を數限りもなく養成しつゝありとすれば、誰か天下の將來に樂觀出が來やうぞ。蒔いた種子は何時か收獲しなければならぬ。

愛國者

明治天皇の御一代中、最も御心を驚かせ奉り、震襟を惱ませまつりし事は、恐らく津田三藏なる者が露國皇太子を撃つた事件であらう。

津田三藏は狂人ではなく誠に愛國者であつた。此類の愛國者は今も我國に少なくないやうである。

自然界と靈界

自然界に屬する部分と靈界に屬する部分とは全然領域を異にしてゐながら、一身の中に近く其境を接してゐる。而して兩界に住む者の感情思考は全然相反する。

自然界から靈界へは躍然として一段の階程を昇らなければ移ることは出来ない。靈界から自然界へは只引かるゝに任せて下降すれば何の苦もなく何處までも落ちるのである。

吾々は覺醒して良心を奮ひ興し上昇しやうと欲しても其足は深く自然界の泥中に拘着してゐるから仲々容易に脱出することは出来るものでない。多年苦學の効によつて

漸く靈界の門に入らうとする者も、深く感染してゐる舊習は一時に脱落するものでない。全く新たなる神の嬰兒に更生するは即ち人の理想の理想である。苦學の中途苟も心を放つて自然界の下地に降り、逸樂を愛し、利慾に誘はれ、憤怒に役せらるれば再び返ることは決して俄に出来るものでない。或は其儘遠く流れ去つて復た歸らない者も世に少くない。或は長年月の後幾苦戰を経て漸く迂回し來ることもある。故に吾々は此間の消息を思ふて嚴に警戒しなければならないのである。

降るに従つて速度を増は自然界の法則であるが、昇るに従つて力を賜はるは靈界の恩恵である。

自然界に屬する力が内に活躍するに比例して靈界に屬する總ては休止する。自然界より更に下つて暗黒に顛倒すれば靈の方面は終に全く衰亡し了る。

治 道

政治家は國を治むるの道を知らない。彼れ等とて恐らく衷心全然それに氣附かない

事もあるまいが併し一向に其道を履み得ない。

治道を以て今の官吏政黨員に期待するは抑も無理であらう。自分自身が治まらないでどうして國を治むることが出来やうぞ。名を好み利を愛するの私慾を抱いて上に立つは只世道人心を亂すのみである。源頭に溯つて毫厘を正しうすることを爲さずしては、百の施設千の法律も畢竟効無きものとなる。世の才人は迂遠にして聽くに堪へず探るに足らざるの言と爲すであらうが之れは自明の理である。

學校の寄附金募集

或學校の校舎を増築すると云ふので資金募集委員の名によつて勸誘狀が來た。其主意は、今や在校生五百に及び校舎の狹隘を覺ゆ、同窓會員は母校を以て各自の物と心得、其發展のため、アワー スクールの成長のために奮發して資を投せよと云ふのである。而して一口百圓と記した申込用紙を封入してある。

之れが世間普通の私立學校の事ならば何も言ふことはない。今の學校計營者は大抵

こんな風な事をするものであるから。併しながら其れが基督教徒の手によつて爲されてゐる事であり、趣意書にも冒頭から神の恩寵とか赤誠とか祈禱とか云ふ文字が並べてあり、事、根本問題に觸れるから一言せざるを得ないと思つた。

抑々教育家の努力と云へば、先づ第一に其精力を自己の内部に向けなければならぬ。兎角教育家の注意が外部に奔せるは世の通弊であらう。生徒の多きを以て一概に學校の隆盛と思ふのも皮相淺薄の俗見に相違ない。責任を思ふ者は決して生徒の多きを喜びもせず、亦望みもしないであらう。

それから基督教徒ならば總てを神に献げて一物を私するなかれと云ふ事を知らない筈はない。學校を建つる初めに當つて定めし献堂の式を擧げたであらう。然るに母校に對し我等の學校、アワースクールなどと心得させんとするは何たる矛盾である。年若き者の淺はかなる名譽心に訴へて寄附金を慫慂するものと評されても辨解の辭はあるまい。

基督教徒は他のために、他に寄與するためにこそ勤むべく教えられて居るではない

か。假令それは個人の利益を企圖する事業でないにしても、其爲に他に求め、他を煩はし、他を苦しむる事は、人を助け、人を救ふの道とは正反對である。

寄附は固より随意に相違ないが、應せざれば不義理のやうに仕向けられては大抵の者が一種の脅迫を感じるであらう。而して斷るにも適當の辭なく、止むを得ずして都合する者もあらう。氣の毒な事ではないか。

大なる校舎、講堂、教會が斯うして立てられる。而して精神的方面に於ては空虚なる此世のものと格別の相違が無い。それでは折角の努力も無意味ではないか。否却つて思はざる大弊害を廣く社會に散布する事となる。

下駄屋の爺

私は下駄屋の爺が何時行つて見ても店の片隅の狭い板敷の上に胡坐かいて一心不乱に下駄を拵へたり、足駄の齒を入れ替へたりしてゐるのに感心して

『お前さんは年が年中朝から晩まで其處に坐り込んで、仕事ばかりしてゐて能く尻が

痛くならないね、やはり何んでも年期を入れて小僧から仕上げなければ駄目なものだね』

と談し掛けた。すると爺は

『どうも中年で始めた者は何時までも斯んな面倒な事ばかりしてゐるのが厭になるものと見えます。先づ慾が出て、それから仕事にあきが來るのでせう。而して何か他の事に出して見たり、又止めて見たり、どうく何をしてよいのか自分でも分らなくなつて了う者もあるやうです』

と仕事しながら言つて聞かせるのである。私は文字も無いやうな者の言に眞理があると思つた。

滑稽なる哉

僅か二三間の堀に粗末な橋を架けて萬國橋と名づけたり、場末の不潔な溝に玩具のやうな橋を作つて日本橋と云ふのを見て、何も笑ふにも及ぶまい。田舎へ行つて見る

と三四尺位の小溝に、氣も附かない程の板を渡してあるばかりのものに、矢張り何々橋何年何月落成など、麗々しく書いてあるのをよく見るものである。

それから田圃道に砂利を敷いて少しく修理を加へたばかりのやうに見える事でも、ヤレ開通式であるとか、祝賀會であるとか言つて知事の代理が來たり、郡長が來たりする。それを亦多くの人々がゾロ／＼羽織袴で迎へに出る。而して代る／＼いかめしい祝辭の朗讀をする。外では煙火を打ち上げる。やがて飲んだり喰つたりして騒ぐ。斯う云ふ物を見、斯う云ふ事に出逢う毎に、如何にも滑稽な、如何にも憐れな感じがする。

銅像

銅像がよく立つ。其れには何れも何萬とか、或は何十萬圓とかの大金が費やされてゐるであらう。

一たい何のために斯う云ふ物を立てるのか。其れが何人かのために多少なりとも益

あるものか。更に解し難い事ではないか。

だが建てる者も、建てられる者も、名を不朽に遺すためとするのであらう。ところが生憎にも耻を後生に曝し、長く識者の笑ひを招くとも知らないのは寧ろ甚だ氣の毒ではないか。

世間には無意味なもの、馬鹿らしい事が盡きさうにない。銅像建立も確に滑稽極まる兒戲的流行の一つであらう。

哀悼靈團

人の不幸を見て冷然として其れを自業自得であると爲し、更に同情の念も責任の感も起らないのは不人情の證據である。今や人情は此世に於て日に月に消滅しつゝある之は争ひ難き事實である。人の世に人の情が亡びて了へば其處は即ち地獄である。今や此世が日に月に地獄と化しつゝあるのも目前の事實である。而して人力を以て之を奈何ともすることの出來ないのを思ふ時に吾々は將來必然來るべき悲慘の極みを兒孫

の爲めに哀まないで抑々何を哀まうぞ。誠に之れを思ふ者は今に於て哀悼靈團を結ぶべきである。

けれども吾等は希望なく徒に悲哀に沈むものではない。況んや苟くも落膽などする者ではない。それは全然其正反對であらねばならぬ。只此世免るを得ざる悲痛慘歎の日の一日も短からんことを祈らざるを得ないのである。

樂觀と悲觀

何事によらず今の時に當つて樂觀する者は即ち夢を見て居るのである。内を觀ても外を觀ても何れを觀ても天下に樂觀すべき點は無い。

先づ最も近く自分自身の内心を省察すれば何人も更に樂觀の出来ないことを知るであらう。若し自ら義とし、自ら是として自ら許す者の如きは即ち偽善の魁とも云ふべきもので其れは衷の未だ甚だ暗い證據である。

暗黒の地に生れ、瘴癘の氣を呼吸して生息する吾等に健全なる者は無い筈である。

『皆曲りて全く邪となれり』とは事實である。故に自ら己の非を知り撓まずして能く戦ふ者にのみ無上の天恵は流入する。『哀む者は福なり』と云ふ、それは吾等に哀むべき事實が在るからである。吾等は重患難症の身でありながら自らそれと知らない故に慙ることも悔ゆることも改むることも爲ないのである。而して只毎日毎年引くものに引かれ、追ふものに追はれて無方に走り行くばかりである。これでどうして人の世に善い事があり得やうぞ。

世人は皆悲觀を笑ふ。故に世は刻々に悲境に沈むのである。悲觀すべきの事實を悲めばこそ初めて其處に樂觀の曙光がかゝりやき來るのである。

悲觀に徹底しなければ此世に希望はない。

百姓は呑氣なものか

百姓は呑氣なものと思はれて居る。其れは天然を相手の仕事であるから、懸引に心を碎く商人や、上官の御機嫌を氣にする役人などより氣兼苦勞は少ないに相違ない。

併しながら百姓とても他から想像する程氣樂なものではないのである。天然と闘う者には其れだけ亦勞多くして而も免かれ難い不安がある。

百姓は百姓の家に生れ、子供の時から見真似、聞真似して成長した者でなければ、朝は朝飯前から、夕は薄暗くなるまで、日々の勞働に堪えられるものではない。

百姓は馬鹿でもなく、病弱でもない強健な人間が家族そろつて打ち懸らなければ生活して行く事の出来ない仕事である。人類の食料生産のために、同じ貴い人間が全く犠牲になつて働かなければならないのである。粒々辛苦とは決して誇張的形容詞ではない。

百姓は馬鹿にも出来るか

如何に勤勉な農夫でも、年々氣候の變化や其他の事情で、何時も二つか三つの作物は必ず作りそこねるものだと云ふ。而してつくづく失敗の原因を考へて、年々工夫を凝らさないことはないと云ふ。だから六十になつても七十に成つても、之れで百姓を

卒業したと思ふことは出来るものでない云ふ。

日本の様な土地の狭い處では小さな畑を成るだけ上手に利用しなければならぬ。だから北國の寒地を除く何處でも年中土地を遊ばせないやうにする。畑の遣り繰りは周到なる思慮を要するもので、門外漢の思ひの外の事である。斯う云ふ苦心は到底常識の乏しいやうな者に出来る事ではない。

或農夫が私に

『此村に百姓仕事ならば何んでもよく出来る云ふ者は向ひの老人位でせう、百姓の真似は誰でもやりますがね』

と言つて聽かせたことがある。農業も入り易くして成り難いもの、一つであらう。

私の友人に帝大に居るのを馬鹿々々しいと思つて、中途に退學して百姓に成つた變り物がある。最初は普通の百姓の真似をするのも氣が利かないと思つてか、農業に關する種々な書物を漁り讀んだりして、色々と新しい試みをやつた。而して滿十年も立つて、やつと其邊の百姓のするやうにするのが一番かしこい有利な方法であると云ふ

事を悟つたさうである。

之は無智な百姓が馬鹿な事を繰り返して、好んで貧乏ばかりして居る譯ではないと云ふ一事を知るために、帝大に學ぶのを迂なりとして赤門を去つた程の者が、實際十年の歳月を要したと云ふ皮肉な談である。

百姓の戦

春から秋に懸けて花畑の雑草は取つても／＼後から出る。二度や三度取つたからとて何にもならない。一週間も立つと何時の間にか又簇々として出て来る。入梅の頃人が畑に這入れない時には此時であると言はぬばかりの勢で様々なる雑草が萌え出る。之れは去年の種子が地中に落ちてゐるためばかりでなく、近所の小山から雑草の種子は何程でも風に吹かれて飛んで来るためであらう。それに草花の丈けは普通の農作物のやうに高く伸びて地面を蔽はないためもあらう。私は殆んど根負けがしさうに成る。

野菜畑の方を見回ると、茄子の葉も胡瓜の葉も引き切りなしに虫が喰つてゐる。

而して葉は皆網のやうに成つて了う。之れは毎朝早く未だ露のある中に一枚／＼葉の裏を反へして退治しなければならぬのである。

私は田園に引込んで心ゆくばかり天然に親む積りでゐたのに、或人が

『あなたは天然と戦つた方がよいでせう』

と言つて呉れた言を其時如何にも没趣味なやうに不快に聞いたが、實際百姓は一方から言へば矢張り絶え間なき戦である。只狡猾なる偽人間を相手に些この油断も出来ず懸け引き交渉しなければならぬ地獄の沙汰とは違ふものゝ、或物を愛護するためには勢ひ他の侵害を防がなければならぬ。詰り此處にも全き平和は無いのである。

自然界に生存競争の行はれる事は如何にしても私には解し難い問題である。畑に出て草を取りながら、虫を殺しながら此事は覺えず考えさせられる。到底何人にも満足なる解釋は出来るものでないと思つゝも。

重大問題

今や我國の百姓は何か別に稼せぐ便宜を持つて居ない限り年々貧乏に成り下るばかりである。浮む瀬とては無いのである。彼等も他の勞働者と同様に一生涯否子孫代々社會の下層に重苦しい壓迫を受けて、目に見えない苛酷なる鞭撻の下に奴隸的生活を脱することは出来ないのである。彼等が馬鹿々々しいと思つて、都會に出て何か別の職業に有り附きたいと希うのに無理はないのである。

農村振興の策と云ふものが在るか。農村問題は如何にして解決が出来るものか。之は重大問題である。尋常の事で解決し得るものではない。解決が出来なければ詰りはどう成る。成り行に任すより他ないのであるか。

顛倒せる暗世の縮圖

門外には見すばらしい陋屋があり、近隣には不潔なる貧民の長屋があるやうな處を人はどうして意に介さないのか、其れは餘り不愉快にも感じさせないものか、態々さう云ふ處を選ぶ譯ではなからうが、少くもさう云ふ處を厭はないものと見え、其處に

家を建て平然として住んで居るのを見れば如何にも不思議のやうである。だが恐らくは之れ等の人々は其れが己の優越をあざやかに感じさせて却つて心に快いのであらう斯う云ふ家に入つて更に不思議なのは、應接間に導かれて主人公の椅子の特に立派な物であつて、來客に宛つるに却つて粗末な物の列べてある事である。座敷に通されて主人公の坐蒲團と客に進める物との甚だしき相違である。之れは總ての客に對し先づ侮辱の態度を採るものではないか。驚くべき事である。

之れ等は世間至る處ザラに見られるものである、即ち顛倒せる暗世の縮圖であらう。

恐るべき石

『此石の上に墜るものは壞れ、この石、上に墜つれば其もの碎かるべし』

此石は人間の舊事舊物總て舊惡に屬するものを一切破壊し盡さずしては残さないものである。故に舊を愛し、舊に安んじ、舊を守り、舊に居る者にとつては之れ程惡むべく、恨むべく、恐るべく、危険なる物はない。

若し世に恐れられもせず、悪まれもせず、迫害に遭う懸念もなく、何時もよく周囲と調和して行くものがあれば、名は何んと言つても、形はどんなに似てゐても、其れは確に此石の類ではない。贗物である。

眞實眞面目の人

眞に眞面目で神を愛し、神に奉仕せんと欲する者、日夜孜々として心力を盡し、唯天意の地に成らん事を祈りつゝ、専心公事に服する者、一點の私心を混えないで天下の公道を履まんと努むる者、さう云ふ者が今吾等の間に何處にか一人でも在るものか。天下は廣い、猶何處にか斯る眞人物が在るではあらう、未だ吾等は之を知らないのである。若し果してさう云ふ人が在るならば、私は早速行つて鞭撻策厲を受けたいのである。但し自分免許の者は直ぐ分る。けれども眞人物はなかく分らない。それは必ず自ら廣告しない。必ず自個紹介をしない。必ず自ら義としない。而して大抵隣人にも知られないからである。

無理なる注文

今の時に當つて道を學び、今の世に於て道を履むことは難事中の難事である。之を以て他に期し、他に望むは容易にすべきものではない。之は特に天命を蒙つた者でなければ苟も望むべきものではない。若し輕々に之を尋常人に期待すれば直ぐに全く其無理であつた事を覺るに相違ない。

講 談

封建時代の俠客傳や、仇討の類である講談なるものが、今猶多數の興趣を惹いてゐる。毎日の新聞紙上にも人を打つたり斬つたりして居る繪を入れて、之れ等の物語りを連載するのは、俗人の嗜好に投じて購讀者を釣る以外に何の意義があるか。

吾等の多數は此の如くに封建時代の生活と精神上格別の相違が無いのである。世界の進運に隨從し行く事さへ、常に甚だ困難であるのに不思議はない。

勸業債券

勸業債券賣出しの宣傳を見る者は何を感じるか。之れ明に露骨なる射倖心の刺激ではないか。一方に於ては民心を毒するものとして賭博・富籤の類を嚴禁しつゝ、自分の手を以て斯う云ふ事を公然やつてゐる。何たる矛盾であるか。爲政家なる者の無責任は總て此類である。

地方人の誇

曾て東北の或處へ行つたら、市の中央に堂々たる西洋風の大きな建築があつた、それは丁度其頃落成したばかりの縣廳であつた。而して土地の人から『縣廳では日本一ださうです』と誇り顔に言ふのを聞いた。

其時に私は之れ全く卑むべき虚榮心の發露ではないか。而して斯う云ふ事のために莫大の費用をかけて、愈々層む租税を縣民全體が負擔しなければならぬのに、何の

遠慮もなく誰が目論むものであるか、亦人民を代表する者の多數も敢て異議を主張しなかつたと見ゆる、而して誰も之れを見て別に怪みもせず、不平も言はず、却つて其建物を指して他に誇ると云ふに至つては随分御目出たい事ではないかと思つた。

時勢の推移

知名の先輩が相會した席上で

『今は年寄りの貴い經驗を無視し、只未來に夢のやうな空想を書いて、前へばかり進まうとする風潮があります』
と不平をこぼした者が在つたと云ふ。

之は眞に其通りであらう、今は社會の積弊に堪えられないで人類が將に一飛躍を試みやうとする時である。故に心の若い者は只將來に向つて理想の實現を期するのである。之に反して年は若くも猶舊時代に硬着する者は他を見て一概に危險視するのである。

何時も新舊兩時代に屬する者が世に入り混つて生活するに相違なく、陰に陽に其間の紛争は絶えないものであらう。特に今日の如きは、時の流が恰も淀みを出て稍急に成つて來た爲め、世界の隨處に新舊の衝突が著しく見ゆるのであらう。

既に年老いたる先輩が、時と共に輕快に移り難いのは無理もないであらう。只年未だ壯に有爲の材を懷きながら、惜い哉志の薄弱なるが爲めか、保守的に固められたる者は時運の進轉が天地自然の大勢であり、之は阻止し得べきものでなく、また反抗すべきものでない事を悟らないで、徒に慷慨して開新の勢に當らうと企つるは悲むべき錯誤であらう。

時勢の推移は遅いやうに見へて實はなか／＼迅速なものである。脱然此世に屬さない者は何時も時の先きに立つて行く。併しながら吾等は常に勉め勵みて日々に新に又日に新にするの工夫を怠つてはならないのである。左もなければ忽ち取り残されて了うものである。

札幌農學校最初の校長

明治の初め開拓使長官として黒田氏が北海道へ赴任した時の事である、全道を開拓するに附ては先づ其指導者を養成しなければならぬと云ふ趣意で、札幌に農學校を興す事になつた。それで校長としての適任者を米國から招聘しやうと云ふので、當時の駐米公使森氏に其旨を通じて然るべき人物を世話するやうにと頼んださうである。因つて森氏はマサチュセツツの農學校長クラーク氏に對し適當なる人物を物色して呉れるやうに依頼してやつた。ところが其返事に由ると、さう云ふ重任に當る者は自分の知つてゐる範圍に於ては自分に如く者はないと思ふ、よつて自分が行くことにしやうと云ふのださうである。森氏は此意外なる返事に驚いたと云ふことである。だが有名なる此人が自分で行つて呉れるならば、此上もない好都合であると喜んだのである併しながら學校では此校長の辭職を許さない。それで止むを得ず在職のまゝ、只一ヶ年間の約束で日本へ來ることになつたさうである。

札幌農學校の最初の此校長は赴任して來ると間もなく、學生に向つて何に憚らず基督敎の宣傳をすと云ふ噂が開拓使長官の耳に入つた。何にしる耶蘇敎と言へば頭か

ら只邪宗門と思ひ込んで居た時代であるから、黒田氏も之れは怪しからぬ事をして呉れる者だと云ふので、早速クラーク先生を呼んで

『斯う々々云ふ噂を聞きますが、其れは本當の事ですか、若し左様な事が事實であれば甚だ迷惑な次第である、さう云ふ事を傳えて貰う積りで聘した譯ではないから今後は斷然止められたい』

と申入れたさうである。ところがクラーク先生は之れに答へて

『私は最初森公使から植民地の指導者たる者を養成する目的で、新に學校を設けるのであると聞いた。それで私は、將來さう云ふ重任に堪ゆる者を教育して呉れと頼まれたので、遙々此處まで來たのである。貴下からも確にさう云ふ意味で依託を受けたと心得て居る。然るに私は學校の教場に於て科學的の講義をするばかりでは決してさう云ふ人物の養成が出来るものとは思はない。之は真正なる宗教を教え、根本的の修養を積ませなければ期待することの出来ないものと信じて居る。そこで自分が最上の道を盡して約束の任務を果たさうとすれば、貴下は其れを以て許し難い事であると言は

れる。然らば私は今日限り速刻暇を貰つて歸國するより他はない』

とキツパリ言つたさうである。黒田氏も之には閉口したものと見える、何にしる米國でも有名なる人を折角公使の盡力に頼つて招聘したばかりであるのに、自分と意見が合はない爲に歸國させると云ふ事も面白くないし、且つ國交上の遠慮もあるし旁々で『それでは兎に角教場に於て丈なりとも耶蘇教のお談義は控へて頂きたい』と云ふ位に折れて了つて、詰りクラーク先生の思ふ儘に何も黙許することに成つたださうである。

それでクラーク先生は相變らず自宅に於て熱心に學生を集めて基督教を講せられたさうである。

抑も最初札幌に集まつた學生の素質が概して善かつたのもあらうが、只僅に一年と云ふ短い間に、あれ丈の感化を残し得たのは、全くクラーク先生の極めて眞面目な勝れた人格の力であると感じせざるを得ない。

私が青年の頃に、基督教の頭目にして或は政黨に這入る者もあり、或は實業界に奔る者もあり、相前後して商賣替をする風があつた。之は無論人によつて其動機を異にしたであらう、けれども亦當時の流行と云ふやうなものであつた。

堂々たる基督教會の先輩と世間からも仰がれてゐた人達が方向を轉じて行く後を追ひ、其後塵を拜する連中が之に倣ふて、柄にも無い算盤片手に損得の掛引を得意とするやうになつて行つたのは當然の事であらう。

併しながら之等の人々の常として、大抵は教壇の上から世間を睥睨し、世は皆愚物の寄り集りであるかのやうに思つてゐたのである。而して何れも乃公一度手に唾して出れば産を作る位の事は何の雜作もないと心得てゐたのである。

ところが馬鹿にしてゐた此世から反對に馬鹿にされて了つた者が多かつた。中には大切な信仰まで跡形もなく失なつて了つたのみならず、却つて世間普通の者よりも一層信用の出来ないやうな者に成り下つた人も少くなかつた。よく『耶蘇坊主の成れの果は箸にも棒にも掛らない』と云ふことを聞いたのも其頃の事である。彼等の間にも

稀には相當に所謂成功した者もあらう、だが虻蜂取らずの者もあり、見る影もなく落ちぶれて了つた氣の毒な者もある。

私などは元とく極めて偏屈の方で、世間に奔走周旋するには適しもしなければ、初めから其れを好みもしなかつた者である。だが何時かは知らず矢張り先輩の驥尾に附いて何か爲さうと云ふ氣になつた。而して手を下すや否や早速投げられて了つたのである。

流行と云ふものは大抵自然の勢から來るものである。而して之に乗るのは餘程危険が多い。自分では乗つて行く積りでゐながら、實は其れに乗せられて行くのである。進退行藏を誤らないことは今の世に於て容易ではない。

偏狹なる愛國主義

尋常小學校の五年になる子供が學校から家へ歸つて

『今日は先生が馬鹿な事を言つた』

と言ふから、こんなことを言はれたか、と訊いたところ

『日清戦争の後に獨逸と露西亞と佛蘭西と三國が一緒に成つて干涉したので折角日本が支那から取つた遼東半島を返さなければならぬ事になつたのである。其獨逸と露西亞には怨を報ゆる事が出来たが、未だ佛蘭西だけが一つ残つてゐる』

と云ふ談があつたとの事である。私は之れを聞いて呆れて了つた。小學校の先生も斯う云ふことを何處かで聽かされて來たのであらうが、馬鹿なことを言つて聽かせるにも程があると思つた。併し子供の言ふことであるから或はどんな聽きそこねをして居るかも知れないし、私は念のために校長に會つて訊いて見やうかと思つた。けれども其れは控えた。此談は兎に角として、今の小學校や中學校の先生から之れに類するやうな馬鹿げた談を聽かされることは決して珍しくないのである。斯う云ふ風にして軍國主義の好戰的氣風が、次代の國民たるべき者の心の中に早くから植え附けられて行くことを思ふと、私は悚然とする。

亦或縣立の中學校で出した同窓會の會報を見た。其中に『ジョルジ ワシントンは

敵國の創建者であるが、併しながら矢張り尊敬すべき英傑である』と云ふ意味の一文が載せてあつた。其終りに『敵國の創建者であるが、ワシントンは英傑である』と云ふのは卓見である』と、簡単な批評がしてあつた。其れは多分學校の先生が評したものであらう。私は此文章と、此批評とを見て啞然たらざるを得なかつた。

凡そ偏狹なる愛國者程國家にとつて恐るべきものはない。之れこそ國を危うする危険人物である。彼等は總ての外國に對して猜疑の念を懷く。而して常に危虞の念に驅られる。決して虚心坦懷他と親和しやうとは思はない。彼等の根性はさう成つてゐるのである。己を愛すると同時に、他を愛し、之を敬する事は兩立し難いものと思つてゐる。

凡そ國家を愛すると云ふも、其れが單に自國を偏愛するに限らるれば、即ち其れは私心の増長に過ぎない。其れは正義に反する。其れは天地の公道に戻る。

要するに最も國家を累するものは、此偏狹なる愛國主義者である。之等こそ常に國威を傷つけ、國利を失ひ、終には國家を亡ぼすに至るも知らないものである。

道 樂

折々人から『貴下は何か道樂がありますか』と訊かれることがある。私は所謂道樂と云ふものは何にも無い、それどころか學ぶべき事、學ばねばならぬ事、爲すべき事爲さねばならぬ事が無際限にあるから、道樂など云ふやうな事をする氣は毛頭起らない。そんな暇は無い、亦在るべき筈とは思はない。だから何時も私は只簡單に、亦無愛相に、『そんなものは何にもありません』と答へるのが例である。

老人連が所在なさの退屈凌ぎに、圍碁や謠曲と可惜時を潰して居るのも憐であるが未だ爲すあるの壯者が暇を得れば遊惰に暮すことを思ひ、或は老人の眞似なごして得々たるを見る時に、私は彼等が向上の志に乏く、耻を知らないのを陋とする。而して古禪僧に倣ふて一喝痛棒を與えたくなることもある。

不良少年

子供が腕白で手に餘ると言つて、其子を連れて或塾に頼みに行つた親がある。其親の談に

『此頃も大分高價な玩具を是非買つて呉れと申し仲々承知しません、そんな贅澤な事を言ふものではないと叱れば、子供は「父さんも立派な家など新築してゐるではないか」とやり返す風で困ります』

と、さも當惑さうにこぼしてゐるのを私は聽いて、窃に其れは尤もな事ではないかと思つた。世間には不良少年が多いと云ふが、不良の者は少年よりも寧ろ其父兄たる者の方に多いに相違あるまいと思ふ。一たい誰が其子と呼んで不良であるとか、腕白で困るなど言ひ得る資格があるか。

忠告に對して

私の知人H氏が曾て米大陸横斷の汽車中、鐵道會社で呉れた案内書を手にながら
移り行く左右の風景を車窓から眺めて、何分山川の名稱が分りにくく、若し此案内書

にさつとした地圖を添えてあつたなら誰にも分り易くてよいだらうにと思つて、ホテルに着いてから其事を下手な英語で認めて鐵道會社の社長へ宛て郵便で出したさうである。

それからヨウロッパの方へ渡り、翌年歸りに又米國へ回つて、ニウヨウクの知人の家を尋ねたところ、知人は

『昨年某鐵道會社の社長へ宛て何か忠告を書いてやつたのは君ではないかと訊いたさうである。H氏は

『如何にも自分が一寸氣附いた事を書いて出したのであるが、其れがどうしたと云ふのであるか』

と問ひ返したところ

『イヤ其社長が此處へ來て「良い注意を與えて呉れた者が在る、其名が日本人に相違ないから或は君が知つて居る人ではないかと思つて尋ねるのである。實は尤もな忠告であると思つたから早速其通りに鐵道案内に沿道の地圖を添えることにしたので、一

度其人に會つて謝禮を述べ、且つ其注意に従つて現に出して居るものを見て貰ひたいのである』と言つてゐた』

と云ふ談を聽いて、H氏は米人の淡泊なのに感心したさうである。

私も今まで公私の事に付て建議や忠告を試みたのは一再でないが、曾て一度でも容れられた事はない。何時も極めて冷然たる返答に接するか、或は表面では好意を謝するなど、言ひながら、内心深く恨みを含まれるのが極りであつた。それでH氏から前の談を聽いた時、人の忠告に對しては誠にさう在つてほしいものだと思つた。

故老に告げたい

私が早く家産を失なひ、今老いて山村に蟄居する様を見て、昔を知る郷里の年寄達の中には、私のために氣の毒だと言つて呉れる者もあると聞く。さう云ふ心の優しい人達に對して、私は一言自分の實際の境遇を斯う告げたいのである。

『私は多くもあらぬ財産を失なつたからとて、それは自分にとつて格別の事ではない

のである。たとへ其百倍或は千倍の富を失なつたからとて、私は餘り惜いとは思はないだらう。自分のためにも、家族のためにも、日常の必要以上に有餘を所持するは決して善い事ではないからである。今私は全地に滿つる財寶を以てしても替へ難い貴いもの、即ち永遠の眞道の一端を教えられて、假令覺束なくも日に斯道を辿りつゝ、老の將に至らんとするを知らぬ者である。腐朽せる此世に於て一物の求むべきものはない。故に其苦も、其樂も、共に世人の知るところではないが、要するに私は氣の毒な者ではなく、寧ろ至幸至福の者である。だから私のためには大いに喜んで呉れてよいのである』と。

腕力と小理屈

強大なる武力を擁して隣邦に對し彼の二十一ヶ條なるものを突き附けた時は丁度歐州大戰の最中である。だから列國が東洋の事などに容喙する餘裕が無い其隙に乗じて爲されたものと見えたのである。あの時私は、之は百年猶且つ拭ふべからざる怨を四

億の民衆に買ふものだと思つた。果して其通りではないか。腕力と小理窟ばかりで何が出来ものか。

自問

己の如くに他を愛するを得るか。

萬民を平等に敬愛して之に事ふるを得るか。

總ての罪を赦して之を惡まざるを得るか。

己を迫害する者をも善人視し、眞に其ために祝福を祈り得るか。

己のために一物をも求むるなく、全心全力を盡して専ら神を愛し、神に奉仕するを得るか。

若し未だ之等の事が實際に出来なければ苟も自ら許して基督の徒と思ふてはならない。其教を聴くのみにして之を身に履行しなければ事實基督に屬する者ではない。また何の益も無いのである。吾等は日々に自ら反省することを忘れはしないか。之れ先

づ省みなければならぬ事である。吾等は常に日に三省のみではない、必ず日夜に反省すべきである。而して勵みて悔改しなければ未だ全く無知なる者よりも却つて不幸であらう。

神は愛なりと云ふ、けれども無私なる神に於て私親は無い。公義なる天の嚴法は畏れて恐るべきである。

検事と辯護士

T君は法學士の辯護士である。職務に熱心であるため相當に世話しく繁昌してゐる或時憤慨して

『検事は只嚴に法に由つて成るべく重く罰しやうとばかり心懸けてゐる。其弊は實に憂ふべきものがあると思ふ』
と私に言つた。私は

『其れも實にさうであらう。だが或知人が餘程辯護士に懲りたものと見へて、辯護士

に一人でも善い者が在りますか。と言つてゐた』
と談したところ、T君は正直に

『實にさうだ、辯護士に一人でも善い者は無いと言はれても仕方がない』
と言つた。醫者は病人が早く直つては面白くないだらう、辯護士は事件が大きくなければ詰らないだらう、坊主は葬式を樂むだらう、之は何の不思議もない事である。斯う云ふ社會に於ては生活のために總て其れは餘儀ない事情であらう。但し検事の冷酷に流れるのは何のためであるか、恐らく其れは惡意地になるためであらう。

洗足池畔の低徊

東京市外目黒から一里半ばかり、洗足池のほとりに一とむら茂つた木立がある。其處に海舟先生のお墓がある。石塔は鎌倉時代の墓によく見る五輪の塔である。而して圓い處に只海舟の二字が刻まれてゐる。其臺石の裏に明治三十二年一月没とあるだけで、其他に何も記してない。之を位階勳等在りたけの肩書を長々と列記した、堂々た

る墓石に比べると大分違ふ感じがする。

お墓の隣に餘り樹木を植え込んでない芝生の土地がある。其處に可なり大きな碑が立つてある。それは元と海舟先生が亡友西郷氏の爲に洛東木下川附近に建て置かれたものである。而して誰にも談されなかつたので、世間には殆ど其れを知る者は無かつたのである。先年其處が取り拂はれる事になつたので、富田鐵之助氏などが主として斡旋され此處へ移したものである。碑の表には南州翁の筆太とに書いた詩が刻してある。裏面には海舟先生が之を建た所以を記してある。それは即ち左の如くである。

慶應成辰之春君率大兵而東下人心鼎沸市民荷擔我憂之寄一書於屯營君容之更下令
戒兵士驕傲不使府下百萬生靈陷塗炭是何等襟懷何等信義今君已逝矣偶見往時所書
之詩氣韻高爽筆墨淋漓恍如視其平生欽慕之情不能自止刻石以爲紀念碑嗚呼君能知
我而知君亦莫若我地下若有知其將掀髯一笑乎

明治十二年六月

友人海舟勝安芳誌

西郷氏が亂賊の首魁となつて横死し、世間の譏譽紛々たる時に當つて、先生は獨り
窃に故人のために往時の功績を追懐し、其素志を明にするために心ばかりの事を盡し
て置かれたのである。何んと云ふ友に厚い事であるか。

附近の雜木林の中に、小さな百姓屋のやうな萱葺の家がある。其處には勝家の墓守
が住んでゐる。實はそれは海舟先生の近親の者である。其男は私が遊びに行つた時に
『今度來る時にはお賽錢を持つて來てお呉れよ』
など、言つて笑つてゐた。其後何處へ行つて了つたか、池の邊に釣をしてゐる姿も見
へなくなつた。

海舟先生が國家の大なる恩人であることは今更言ふまでもない。個人としても先生
のお蔭によつて其家を保ち、其急を救はれ、亦其力を籍りた者、お世話になつて出世
した者などがどれ程あるか知れないだらう。假令先生は曾て只の一度でも自分一家の
事に付て人に頼まれたことが無かつたにせよ、遺族の一人が此のやうに落魄してゐる
のを見ると、之は餘りに濟まない事ではないか感ぜざるを得なかつた。

併しながら勝先生は無論の事、此人に於ても更に何等世に求むるところは無いのであらう。而して恐らくは此人も世渡りが下手なのであらう。否、餓死してもそんな真似が出来ないのであらう。

世に充滿する者

此世は自ら耻なしとする者、自ら智ありとする者、自ら大なりとする者、自ら義しとする者を以て充滿する。

彼等は、此世の不義を悼み、不幸を哀む者、自ら憤發して罪惡を脱せんと悶ゆる者を了解し得ない。而して神と兄弟のために忠實ならんと努むる者を目して、物好きなる醉興と心に笑ふ。或は傲慢にして世と相容れない者と罵るのが常である。

小楠先生

小楠先生は維新前後を通じて一代に卓越した人物であつた。曾て勝海舟先生が

『己れは天下に恐ろしい者を二人見た。其れは西郷南州と横井小楠だ。小楠は自分で仕事をする人ではないが其思想の高調子には驚いた。己れなどは迎も梯子を掛けても追つ附かないと思つた』

と言はれた事がある。

左に其詩二三を録する。

偶作

帝生萬物靈 使之亮天功 所以志趣大 神飛六合中

寓言

心虛即見天 天理萬物和 紛々閑是非 一笑付逝波

偶成

群獄亂山總草茸 奇觀何處立斯筓 愛來大丈夫心事 寄在芙蓉第一峰

又

神知靈覺湧如泉 不用作爲付自然 前世當世更後世 貫通三世對皇天

明前世王者之道盡心於當世以開後世謂之君子之志

二天の畫に對して

一日友人を其閑居に訪ふた。時に友人は床に懸けた一幅の繪を示して見せた、それは破墨山水の圖である。如何にも良い物である。近づいて見ると二天と云ふ印がある。私は其繪に見取れて了つた。何んと云ふ氣品の高いものであるか。覺へず涙さへ催さるゝ。宮本武藏と云ふ人は非常な人傑であると兼て承知してゐる。其畫にも神品と云程の物があると聞いてゐた。今初めて此人の筆に成つた物を見て實にもと感じ入つた。何んと言つても人格である。技巧は末の末の事であると思つた。それは政治でも宗教でも總て同じである。

白隱禪師

私は青年の頃に、近代の聖僧と言はれた白隱禪師が、門前の豆腐屋との關係に付て

の談を聞いて、如何にも心の大きい者だと深く感服した。而して自分もどうかして斯う云ふ寛大な者に成らなければならぬと思つたのである。だが私のやうな者は思ひ懸けない誤解を受けたり、詰らぬ侮辱を蒙つたりすると、何分にも笑つてゐると云ふ事が出来ない。而してムキに成つて辨解したり、反抗したりする氣になる。假令其場は忍堪しても、それだけ後まで心持が良くない。自分で謙和の溫情を損して了うのである。

さう云ふ時に不圖白隱禪師のあの談を思ひ出しては、自分の局量の如何にも小なること、幾つに成つても腹を立る癖の改まらないことを深く哀まざるを得ないのである

村の百姓の談話 三つ

お晝頃に二三人の者が田圃の端の野芝の上に坐りこんで辨當を開きながら、何んの遠慮もなく大きな聲で、何んだか寺の談をしてゐるやうであつたが、一人の者が

「一たい坊主などは仕方があるものか、俗に慾の深い者の事を、あの人は坊主のや

うだと言ふではないか』

と言ふのを私は其處を通り過ぎながら聞くともなしに聞いた。而して獨り窃に、坊主が民衆から些の尊敬を拂はれないのみならず、却つて輕侮を受けてゐるのは今に始まつた事ではないが、愈々彼等は世に無用の長物となるばかりであらう。然るに爲政家たる者が今猶社會の教化を以て多少なりとも彼等に對して期待するが如きは實に馬鹿げた談であると思つた。

其二

或時また近所の者が、人に頼まれて村の物持の處へ金策に行つたところ、其處の爺が

『本人は善い人だと云ふなら猶更の事である、金を貸す譯には行かない。なせかと言つて、さう云ふ人は屹度約束通りに金を返して呉れる事は出来るものではないよ』と言つて融通して呉れなかつたと云ふ談を聽いて、之は實際を穿つた面白い談だと思つた。

兎角心の温厚なる者は有爲の才能に於て及ばざる傾きがあるから、概して好人物は働きが無いと思はれる意味もあらう。また今の世に於ては狡猾なる者、自分勝手なる者、不人情なる者、慾深き者、剛情なる者が何れの方面に於ても景氣がよいのに反し温和なる者、正直なる者、總て人柄の善い者は却つて多く窮地に陥いるのが普通であるから、一方からは寧ろ相手にされないのであらう。

其三

或夏の事である、日中の炎天をも厭はず隣家の男が元氣よく畑を耕しながら、何を感じてか私に向つて歎息して

『年々に世間の人氣が悪くなると言ひますが、年々どころではありません、どうも日増しに悪くなるやうです』
と言つた。私は素朴なる農夫の口から斯う云ふ歎聲を聽いて、特に選ばれたる十二の使徒達の事を思ひ浮べた。

明治の末頃になつては漢學者と云ふ者も大抵凋落して了つた。其中に根本通明と云ふ老人が残つてゐた。帝大や早大の講師であつたが仲々頑固な人であつたと見へ、平生鐵扇を提げて放さなかつたのは能く人の知つてゐる事である。

或人が此老人を評して

『聖人の道を口にしながら、あの位聖人の道に遠い人も珍しいものである』
と言つてゐた。能く説き、能く辨する者に限つて實行が伴はない。

梅田坂

梅田の坂も今はトンネルが出来て、誰も昔の道を越す者は無いであらう。私は未だ能く歩くことさへ出来ず、守の小女におんぶして貰う幼い時から幾度あの坂を越したことであらう。私にとつては思ひ出多い處である。

家の方からの登りは可なり急で、息を切りつゝ登つて行くのである。登り詰むると丁度東京灣を隔て向ふに上總の鹿野山、其少し南に房總の境をなす鋸山等が一目に

見ゆる。北の方が晴れてゐる時は遠く常陸の筑波も能く見へる。あの廣々した眺望は何時行つて見ても見飽きなかつた。

或日の夕方私は草茫々と生い茂れるあの坂道を獨り辿つて、見はらしの良い峠の路傍に坐つてゐた。其處は絶えて人通りもないから周圍に懸念する要もなく、心ゆくばかり祈をしてゐたのである。すると何時の間にか日も暮れて了つたと見え、身體が冷やく／＼して來た。氣が附いて首を擧げると、月は皎々として東の空に高く上つてゐた而して自分の着物は露にしめつてゐたのである。

何をそんなに深き思ひに沈み、切なる祈に吾をも忘れて、獨り寂しい山上に坐つてゐたのであるか。爾來春風秋雨三十年、私の頭髮も半ばは白くなつた。若かりし昔の憂ひも煩ひも今は思ひ出すべき由もない。

だが、全地に氾濫する濁流のたゞ中を、浮きつ、沈みつ、天祐神助を祈りつゝ、猶彼岸を目ざして泳ぎ通してゐるのである。

山家集

私は若い時に随分西行法師の山家集を愛讀したものである。繰り返し／＼大抵暗誦する程に愛讀したのである。どうしてそれ程此人の心持に共鳴を感じたものか。さうまで親しんだ書物は不用になつたからとて捨るに忍びないもので、今猶押入れの隅に投げ込んである。偶々取り出して開いて見ると、どの歌にも厭世的な、絶望的な、悲哀の調が感ぜられる。そちこちと讀んでゐる間に何時か引き入れられて滅入つて行くやうな氣になる。恐ろしいやうである。

西行は多情多感で意志も頗る強剛な質である。而してあゝ云ふ時代に生れ、あゝ云ふ境遇に身を置いたのであるから、あゝなる筈であらう。勝海舟先生は古今第一等の人傑である。さうまで西行を感歎されたさうである。

私は青年の頃から假令偏狭なるオルドリドックスにせよ基督教の一端を傳へられて、聖書も讀まないではないのに、生命の道を昇り得ないで、西行法師の後を追ふて希望も喜悅もない、只寂寞孤獨を悲しみながら沈んで行つたのは何んと云ふ愚鈍であつたのか。それも未だ二十代の時だけならば兎に角、三十歳を越へて妻子ある身でありな

がら、寂しい、悲しい、薄暗い、死神に取り附かれたやうな氣分から容易に脱することが出来なかつたのである。

倒 瀾

歐州大戰の勃發せんとする際、我國も俄に起つて聯合軍側に加擔し、急いで獨逸に對する戰鬪に着手しやうとする形勢を見て、何んとかして馬鹿げ切つたる大罪惡の仲間入を止める工夫は無いかと小さい胸を痛めたが、それは隻手を擧て倒瀾を回へさうとするやうなもので、勿論どうする事も出来る筈がない。

其後西伯利亞出兵と云ふ聲が高まつて來た時にも、其れは雷に無意味に終るばかりではないから必ず一兵をも出すべきでない、と思つたが矢張り手の出しやうもなかつた。

斯う云ふやうな場合に處して、吾等が如何に焦慮したればとて到底國家の大過失を未然に制止することは思ひもよらない。而してそれは今後とても無論同じ事であらう

無感覺、無責任

何事も習慣になれば無感覺となる。働かないで此日を過しては濟まないと思ふ者も若し衣食のために心を勞する煩ひが無い生活を續ける時は何時とは知らず其れを勿態ないとも思はなくなるものである。況んや初めから生活の困難と云ふ事を知らない者、人生の辛酸を嘗めない者は、世間多數の人間が衣食のためのみに如何に奮闘して一生何んの餘裕もなく惨めに暮してゐるかと思ふ事を察することは出来ない。

何れにしても生活の勞苦を免れたる者は碌々爲す事もなくして暮しながら、粒々辛苦の汗の結晶とも云ふべき米の飯を食ふて別段それを何んとも感ずるものではない。人の困窮を見ても其れは只無智無能或は不徳の至す當然の因果であると思ふか、又は單に彼等が生來の運命であると思ふくらひに止まるであらう。而して全世界を通じて人類の大多數が日に月に増々不安にして勞苦多き生活を營みつゝある此不幸なる事實に對して何等の責任を感じないのである。

山岳を汚すな

凡そ人が多く行けば如何に氣持の良い處でも忽ち厭な處に變化して了うものである。高山峻嶺も登山者が多くなれば澎湃たる靈氣はやがて何處へか消え去つて了ひ、而して下界と差したる相違もない索漠たる俗境と化するものである。

元來は人が行くために其處が汚れる筈はない。只不謹慎な態度を持して行くから何處でも汚され亂されるのである。彼の幾度かの登山に汗で染めたやうな古びな白衣を着、腰には鈴を結び附け、口に六根清淨と唱へながら隊を爲して行く者達は原始的な一片殊勝な信仰の心が在るであらう、だから之等は未だしもである。だが漫然流行を追ひ好奇心に驅られて出懸けるやうな徒は概して甚だ不謹慎である。さう云ふ種類の者は只山岳を汚し荒すばかりである。

特に近年忌むべきは山岳に登る者から『自然を征服する』など、云ふ無法な暴言を聞く事である。さう云ふ心持で登山しては如何なる山へ登つても其人の精神上に何等

の益となるものではない。其れは貴むべく、仰ぐべく、親むべく、愛すべき崇高秀靈なる大自然に對する不敬である。反逆である。即ち亂賊の心である。心得違ひも甚だしいものと言はねばならぬ。

此頃は年々の如くに某聯隊から兵隊を率ひて演習のために北アルプスへ登ると云ふ事である。而してあの大雪溪で發火演習をした事もあると云ふ。若し其れが事實であるならば如何に無知なる軍人の仕業とはいへ沙汰の限りでないか。

深草の元政

昔は超凡の資を懐いてゐる者は多く佛門に入つた。故に沙門の中には大徳の人傑出の材が少なくなかつたのである。深草の元政上人の如きも確に其一人である。彼の詩を見ると高邁なる氣品と、潑瀾たる才氣が看取される。亦其筆跡を見ると如何にも堂々たる雄大な精神が忍ばれる。左に草山集の中から記憶に存する二三の詩を録する。

鷗朋鷺友水雲村 來往時敲月下門 一夜空山無限量 幾回欲語也忘言

行盡千峰又萬峰 石落水流白雲生 深山大澤無人到 偶爲尋牛却見龍

睥睨塵世韜晦林丘 水雲雪月之吾同友 有時說法示眞際 頑石無心獨點頭

坊間傳ふるところの彼の辭世の一句の如きは全く後人の戯作に相違ない。元政の詩歌にはあゝ云ふ調子のもは他に一つも無い。元政上人の平生は極めて謹嚴であつたと思はれる。決しておどけたやうな、ふざけたやうな人ではなかつたのである。況んや此人が死に臨んで苟も軽々しい狂歌など讀む筈はない。

厚 氷

あつ氷むすば、結べ厚くとも

碎にかたきことはあらしな

私は折にふれては海舟先生の此歌を思ひ出す。けれ共餘り騒いで無理に氷を碎かないでも、春にさへなれば自然に氷はどけて了うものである。私は忍堪して春を待つ。元氣よく氷を碎かうと奮闘する人達の勇氣は賞すべきであるが、私は寧ろ天の時を待

ち、春陽の到るを迎へるために怠らず勤むる農夫に學ぶであらう。

柔能く剛を制す

妻は他所へ行つて來ては

『何處の家へ行つて見ても妻君が權力の在るのに驚きます』

と、其れを羨むやうによく言つた。男子には一寸そんな様子は解らないが其實、家中では仲々妻君に勢力のある者も少くないと見える。而して知らず／＼妻女のために驅使されてゐる男子も珍らしくないのであらう。

剛情で虚榮心の張い女性は誰でも之を制する事さへ容易ではない。況んや之れを改め、之に克たしむる事は期し難いものである。大抵の男子は長い間に根負けをしてう。即ち柔能く剛を制すと云ふものであらう。

今後女性の間、恭儉にして大節に殉ずる程の誠忠の者が輩出して、同性の救済のために力を盡さない限り、此世は到底浮むものではない。

藤の蔓

山路などを歩いてゐると、藤や葛の蔓が樹の幹に卷附いて、枝の上まで一ぱいに蔽ひ冠ぶさつてゐるのを見るのがよくある。

私は其れを見ると、弱い女性が雄々しさうな男子に依頼しながら、精神的には之を束縛して了つて、徳性の開新を阻むでゐるのに、よくも似た現象であると思はざるを得ない。

政府

『政府の爲す事は内治外交を問はず、なせ何時も小刀細工ばかりで馬鹿げてゐるのか呆れざるを得ない、愛相も盡きて了うではないか』
と私が言つたら友人は笑つて諭すやうに

『それは今更歎息する程野暮である。最初から詰らぬ者ばかりが官吏に成る譯でもあ

るまいが、大抵長く役人をして居ると良い加減妙な者に成つて了う。其中で官海遊泳術に長じたる者、即ち一層俗才ある種類程出世すると云ふ具合もある。政府はさう云ふ者共の寄り集りに他ならない。だから實際何んと言つても彼等に碌な仕事が出来やう筈は無いではないか』

又言ふのである。私は之を聽いて默然として深く沈思するばかりである。

若し吾々はさう云ふものを養ひ、支持し、戴いて、其司配を受けなければならぬものとするれば之れ程笑ふべく、悲むべく、怒るべく、憐むべき愚な事はあるまい。何とかして之を革め之を打開する工夫は無いか。

けれども考えて見れば之も根本問題に屬する至難の事であらう。議會は此の如く、政黨は此の如く、國民の多數が今の如くである以上、政府ばかり獨り賢く、善く成る筈はないであらう。

友人のために齋名を選ぶ

一友人が病弱の故に業を廢して閑居するため瀟洒なる家屋を新築した。而して其齋名を何とか私に考えて置いて呉れぬかと言ふのである。私は承知して、書經、詩經、禮記、易經と古典を取り出して折々繰り返して見たが、どうも一寸適當なる文字を見出し得なかつた。よつて自由に聖言の意味を採つて得た文字に左の如く簡單な解釋を附して送つた。

謙受堂

謙は徳の基、心能く謙に下らざれば神の教(即ち人の道)を受くる能はず、謙々として嬰兒の父母を慕ふ如くに神を思ひ奉る、これ清福に入る唯一の道なり。

安懷堂

胸中の俗塵を拂ひ、大父母の慈愛を思ふて御懷に休安す。

不求庵

一物をも求めず、只大父母なる在天の神を愛し、兄弟なる全地の人を想ふ。

福始堂

眞面目に神を信じ、心を虚うして其教を學ぶ、之れ永遠眞福の始めなり。
退謝軒

慾無くして退いて感謝する者のみ獨り靈に於て進取す。

右の中若し心に叶ふものがあれば一つ選むやうにと書き添えてやつた。幾日か過ぎ
て友人から『新約全書の中の文字を採つて別に齋名を定めた』と云ふ端書がといた。
それで此草稿は不用のものではあつたが、其儘反古籠の中へ投げ入れて了ふのも多少
忍びない感じがしたので茲に寫して留むることにした。

下學上達

『大功は細瑾を顧みず』と云ふやうな東洋風の不謹慎な心得違ひが猶若し吾々の心の
何處かに殘存して居るならば、それは早く徹底的に改むべきである。

凡て目前卑近の細事をも忽にすることなく、忠實に考慮し、爲すべきの事に對して
は相當の力を盡すこと、これ即ち衷に誠意を養ふ唯一の實學である。

衷に誠意が缺如すれば眞に眞面目になることは出来るものではない。誠に眞面目に
毫厘を正しうして赤子の父母を慕ふ如く溫柔小謙なる者に成り得ない限りは、私慾を
以て道を見る事も道に進む事も絶對に出来るものではない。

二而一の道

吾等は時に吾友に向ひ、或は家人に對してすら『惡魔よ吾後に退け』と叱咤しなけ
ればならない事がある。而して猛然として獨幕進しなればならない事がある。だが
之れ亦皆神の慈愛し玉ふところの者で、吾等の兄弟なる事を夢にも忘れてはならない
のである。故に吾等は平生毅然として人と相離れて居なければならぬと同時に、己
の如くに他を愛して其苦樂を俱にしなければならぬのである。之れ亦二而一の道で
ある。

「吾れ世に勝てり」

『吾れ世に勝てり』とは世に大なる告白ではないか。だが吾々は此語を聞いて別に之

を偉なりとも感じないではないか。此世に居て、此世を友とし、此世を愛し、此世を悪まず、此世を憐れまず、只此世と浮沈して、此世と終始する者には之れ全く無意味の言であらう。彼れ等は世に屬する者であるからである。之れに反して、此世に居ながら此世と共にせず、此世の偽善を悪んで此世に染まず、此世の俗悪を厭ふて之を打破せんとし、此世の不幸に冷淡なる能はずして其苦を願たんと欲する者は、皆人間の甚だ弱くして靈戰の容易ならざるを覺るであらう。

嚴冬の旭日

旭が東山の上より高く昇り出で、滿目霜に凍れる原野を照す時、これを仰いで暫く其の柔かにして暖かなる光線を浴びつゝ立てば、心は洗はれ、罪は焼かれ、身も亦躍如として天外に飛ぶの思ひがする。

後の雁が先になる

世の先輩は何時までも自ら先進者と自信して居る。而して何時までも他に對して指導者を以て自任して居る、然るに若い者の歩みは思ひの外早い。子供が暫くの中に見違へる程成長する如く、先輩が相變らず先覺者と思ひながら説教や講演など繰り返して居る間に、若い者はずん／＼先輩を追ひ越して遙か先の方へ進んで行つて了ふ。彼等は心も足も輕快で面白さうに時の進運に乗せられて躍り行く。それに反して先輩の士は年と共に何時か其血管漸く硬化し、精神も肉體も段々重々しく迎も昔日の調子を以て歩むことは出来ないのである。故に其思想は最早人を前方へ進むる用をなさず却つて後方へ引き戻さうとすることになる。恰も從來の社會制度に執着する者が何時までも開新を悪んで歴史の進轉を拒まうとばかり企てながら、自ら天理に背反するものとは氣附かないで、却つて他を目して或は過激となし、或は危険と評するに等しいものである。

斯くの如く天下の大勢に後れて取り残されると云ふのは、畢竟自ら限り、自ら許し中途にして日に新にするの工夫を忘れる故である。要するに其私に固定する過である

而して世の先進の士が未だ五十六十の分別盛りの年にも似ず、滔々として時に適せざる者と成り果つるは、誠に惜むべき事であり、亦氣の毒な事と云はねばならない。

基督者

今の世に於ては尋常の覺悟を以てして基督の教に従ふことは斷じて出来るものではない。凡庸の者は決して基督者となることは出来るものでない。駱駝が針孔を通過するよりも難しと云ふのは只富者にのみ當てはまるべき比喻ではない。吾々總て皆然りである。

だが何人と雖も若し非常の覺悟を以て眞に基督の教を遵奉履行すれば、則ち非常の心を有する非凡の人とならざるを得ない。基督は聖の聖なる神人である。其教を受けて之を守る者は皆一樣に小基督とならなければならぬからである。

彼等の精神も思想も感情も總て此世のそれと全然相違しなければならぬ。決して其れは類似するものでもなく、妥協の出来るものでもない。基督者であつて而も此世

に處して融通自在であると云ふ道理は斷じてない。人は二人の主に事ふことは出来ないからである。

世に革命者と云ふ者が在るとすれば、眞實徹底的の革命者は即ち基督者である。神の御心の天に行はるる如く此地上にも成就せんことを日夜祈願する者であるからである。

人類は宇宙の主宰たる神の愛子であることを知る者は、必ず人類全體の福事を以て念とする苟も一身一家の名利を思ふ私心は寸毫も在つてはならない。

畑の雑草

畑の雑草はツイ數日前に悉く取り盡して置いたと思ふのに何時の間にか又簇々と萌え出る。春の初から夏を通して秋の末頃まで幾度となく根氣よく之れ等の雑草を抜き取らなければ、蒔いた物も植へた物も皆壓倒されて了う。だから油斷してゐると家の前の花畑も荒地であるか牧場であるか分らないやうに成つて了う。

私は畑の雑草を取りながら何時も思ふ、人心も之と少しも違はないと。不斷に注意してゐても雑草は繁茂し易いものである。而して良心の方は何時も壓倒され勝になるものである。どんなに勉強して掃除して置いた積りでも迂つかりすると何時か知らぬ間に又荒れて来るものである。雑草の種子は此世に充滿してゐる、而して断えず飛んで来て心の畑に蒔き附けられる。地質が良ければ良い程雑草も勢よく生長する筈である。だから此世に生きてゐる間は誰でも決して油断など出来るものではない。孔子が『徳の修まらざる學の講せざる義を聞て移る能はざる不善改むる能はざる是れ吾憂なり』と歎息したのは實に正直なる告白である。

然るに世間には自分はまだ修業は濟だ者である、エライ者であると内心自ら許してゐる者が幾らもある。甚しきは憶面もなく自ら神と合一した者であると公言するさへある。之れ等は不遜と云はふか不明と云はふか佛者の所謂法慢に墮すると云ふ者であらう。自ら義とするは即ちバリサイの徒にして基督の最も痛罵されたものである。心の清淨を期する者は必ず不斷の警醒と終生不撓の勉強を要するものである。

田舎で見る厭な事

田舎住ひは四季折々の趣が盡きない。但し春も過ぎて麥刈が始まる頃から夏を通して秋の末に至るまで、毎日の如くに日に幾度となく殆ど堪へ難い厭な事に出會ふ。それは或は庭前で、或は門外で、或は路傍で起る自然界の小事件である。即ち蛇が蛙を呑む事である。蛇には蛙ばかり餌食にしてゐる種類も在るやうに見へる。それ等は蛙を呑まなければ生きて居られないのであらう。けれども生きながら呑まれる蛙は憐れな物である。切に悲鳴を上げるのは救助を求めものゝ如くに聞える、あの聲を聞かされては知らぬ振をして居られるものではない。私は書齋から飛び出して手當り次第に竹でも棒でも持つて、何處で呑まれつゝあるかと時々聞へる憐れな物の聲を便りに草むらの中を叩いたり、池の中を窺ひたりして、呑まれて了はない中に助けて遣らうと急いで其れを探すのである。幸に見附け次第蛇を打ちのめして蛙を遁して遣らないでは居られない。御苦勞な事をするもの哉と笑ふ者もあらうが、私は斯う云ふ事に出

會ふ毎に、自然界の至る處に行はるゝ残酷な事實に對して、何時までも解決し難い不審に襲はれるのである。

老人の油斷

追々年を重ねるに従つて善徳も亦自然に吾身に圓熟して來るものと思へば、それこそとんでもない誤である。誘惑は若い時にのみあるものではない、其種類こそ時と處によつて變るけれども、何人も此世に生活してゐる間は決して油斷の出來るものではない。

若い時には誘惑も猛烈に襲撃して來るが、其代りに氣力も亦盛んであるから斷乎として萬魔に抵抗する勇氣も起る。之に引替へて誰も長年月の間斷え間なき戰鬥のためには自然に昔日の英氣も衰へ、反省憤發の力も減じて來る。故に餘程氣を附けて日々新にするの工夫を講じないと、日に固陋に化し、愈々時勢後れの厄介者になつて了うものである。世間の年寄は大抵さうではないか。

エツクハルトの感想抜粹

神に對する愛から流れ出るものは皆徳に屬する。

善は神の意志たるが故に善なりと云ふ見解を却ける。善且合理的なるが故に神の意志だと云ふ風でなければならぬ。

神から報ひられることの爲に神を求むるは、乳を取る爲に飼ふ牛と同じに神を考へるものである。

一個の「我」と「求」とがある限り、人間が神を求めることを強く却ける。善の爲の善ではならない。即ち我々が徳それ自身でなければならぬ。

眞に徳ある人は善を他の目的の爲にではなく、善それ自身の爲に愛する。

何か或特殊の考が勢を占めたり、何か自分の利益が求められたりすればそれは最早

徳行ではない。其反對の不徳になる。

凡そかゝる者は耶蘇が聖殿から追ひ出した商人達に等しい。彼等は他物の爲に一物を與へんと欲するのである。いはゞ我々の主と取引をしようとするのである。彼等は望んだものさへ與へらるれば神其ものはかまはない。

己の魂を救はんと意圖を以て世の寶を捨てる人は、如何ばかり棄つるところが些少で卑吝であるか知れない。

地獄の苦を恐れるが爲に罪を棄て、神に對する愛から之を棄てぬ時は、それは奴隷の恐怖である。

徳それ自身である人の外は誰も徳を愛しない。

人は善とならんが爲にあらゆる努力を盡すべきである。何を爲すべきか、若しくは個々の行爲が如何なる性質であるかよりは、寧ろ諸々の行爲の根底は如何なる性質であるかに心を込むべきである。

人がその自由意志を以て一時的の物より神即ち最高の善に向ふのは魂に於ける神の恩寵の印しである。

神は我々から少しも仕事を要求しない。彼は我々の魂の中で恩寵の仕事をする。

人間の本質の破滅は「罪の奴隷」である。

魂が凡ての他のものに對してより高い位地を占めて居るのはその自由に基づくのである。かくて魂は誰人も自分を強制することの出來ぬのみか、神でさへも自分を強制

することを欲しないと云ふことを知る。

意志の力はその向上努力に際して少しの強制をも受くることを欲しない程自由である。

それ故神は魂に對しては意志の自由なる應諾なしに何事もしない。

汝自身の外誰も汝を妨げ得ない。

我が欲するところのものを我はもつ。自由意志を以て我はあらゆる事を爲し得る。

神が天と地に於て成した凡ての仕事は、神が一つの仕事を爲さんがため、即ち我々を幸福になさんが爲にしたのである。

神は何れの人にも何時も其人に最も善い物を與へる。

聖靈なくして我々は何も出来ない。

凡そ神の活動がなければ肉體と魂とは到る處に死んで了ふ。恩寵が絶えず魂の中で力を揮つて居なければ、魂は枯木の如くにして一つの實をも結ぶことは出来ない。

神が我々に與へんとする要求は、我々が受けんとする要求よりも一層強いものである。

神は我々が願ふまで待ち切れぬ程我々の友情を要求する。彼は我々の處に来て我々に彼の友たらんことを乞ひ求める。

神は罪人を改心せしむるには千の天地を造らんとするよりも一層彼のあらゆる力を要する。何故なれば、天地の創造は神があらゆる被造物の助力なく全然獨力で爲したのであるが、罪人を改心せしむるには罪人が彼を助けるを要するからである。何となれば彼は人の助けなくして人を改心せしむることがない。

汝が神から汝の人間性を稟ける如く、神は汝から彼の神性を受ける。

我々は自然的には主我的の有様にあるが本質に於ては神の中にある。我々には知られてゐないけれども神は我々から遠く離れてゐない。彼は我家の戸口に居る。

人は神を恐れてはならぬ。恐れは時に有害である。只神から離れることの恐れのみが正しい恐れである。

我々は神を求むるに當つて、外に出るよりは内を探すがよい。神は我々の内に居る神が我々の求むる凡てのものを我々に與へないと云ふ原因は我々に在つて神にはない何故なれば神は、我々が與へられたいと思ふ欲望よりは千層倍も大いに與へたいと云ふ欲望を持つ故に。

自然が自己の手段よりして到達することの出来る最高なるものに到達する時、初めて神は其恩寵を以て入り來り、而して魂を完成する。

人間自身の意志は寧ろ止息せねばならぬ。魂は自分を純粹に受身の位地に置いて神を自分の中に支配せしめねばならぬ。

神は業を見ない。只その業に於いて如何に愛があるか、如何に心ばへ、情意があるかを見る。なせなれば神は業其ものに用はない。只あらゆる業に於ける我々の情意が即ち我々が只神のみを愛することが肝要なのである。

神に百マルクの金を捧げる事は大なる行であらう。大なる行の様に見える。併し實際私が若し持つて居れば百マルク捧げやうと云ふ眞面目な意志さへあらばそれを捧げたも同然である。

最も奥底から出でずに外部的の原因に由つて起された業は凡べて神前には死んで居る。只自己の活動の原因を自分の中に持つ者のみが生きて居る。

祈禱、讀書、讚美、徹夜、斷食、禮拜、懺悔、其他凡ての苦行は只自己を神より隔つることに對し、凡て不神聖なるものに對して人間を守る爲めに案出されたものである。それ故人が未だ己を弱く、神と疎遠であると感じる間は此れ等の行爲は必要である。併し眞の信仰を己の内に認めたらば直ちに思ひ切つて凡ての外部的のものごと絶つべきである。

汝に固着せる被造物のほんの僅かの像も神の如くに大きい。何となれば汝をして全く神を失はしめる故に。

凡ての被造物に空しきは即ち神に充てる事である。

凡ての物を受けんと思ふ者は先づ凡ての物を棄てねばならぬ。

神を受け容れんとする者は全く自分を棄て自分から釋放されねばならぬ。

汝が汝自らを幾分なりとも尊重する間は、汝は神の何たるかを知らない。

此世の凡ての愛は自愛の上に建てられて居る。汝が此自愛を棄てたとすれば即ち全世界を棄てた事になる。

人が全く神の意志の中に入り自分の意志なきに至るが、即ち完全にして眞實なる意志である。

我等が愛に住すると同程度に神に住する。

愛は善より外の何物にも向くことが出来ない。

上から受けやうと思ふ者は必然正しき謙遜に於いて低く身を處さねばならぬ。

人が本來何物なるやを知り、無から作られたものだと思ふ事を飽くまでも自覺するは正しい謙遜である。人が有爲無爲に際して自ら撰ばず、正しき有爲無爲を見出さんが爲に恩寵の光を待つは、人間の本性に合した正しい謙遜である。之に對して神が精神の中に爲すところの一切の善をば自らのあらざりし時に神が爲したるが如くに殆ど

自らに歸し若しくは自らのものとするものないのは精神の謙遜である。

此謙遜は今や人間に對して現はされる、正しき者は自らを地上に在る最も詰らぬ者と思ふ。それ故其人は凡ての人々の中に謙遜することが出来る。

基督のみが我々の追究の終局の努力の目的でなくてはならぬ。而して我々は彼と合一して我々に與へられる合一の程度に従つて彼のあらゆる光榮と等しき光榮に與らねばならぬ。

故山田又吉氏の翻譯に據る。

エックハルトは一二六〇—一三二九、獨逸神秘學派の祖。

明 惠 上 人

梅の尾の明惠上人は曾て我國の産したる最も貴い高僧の一人である。彼の傳を讀む

と涙を催ふさしむる節がある。左に二三の記事を摘録する。

或時建禮門院御受戒あるべしとて上人を請じ申されて、御身は母屋の御簾の内に御座して御手ばかりさし出し、合掌して上人をば一長押し下りたる處に置き奉りければ、上人曰く高辨は湯淺の權守が子にて下もなき下臈なり、然れども釋子と成りて年久く行へり、釋門持戒の比丘は神明をも拜せず、國王大臣をも敬せず、又高座に登らずして戒を授け、法を説くは師弟共に罪に墮するなりと經に戒められたり、是れ法を重んじ苟にせざる故なり、身をあぐるに非ず、斯る非人法師をも御崇敬なされ候へば、利益まこと多く、いやしみ蔑しみ給へば大罪愈々深し、いかに仰せ辱なくとも本師釋尊の仰を背きて諂ひ申す事は有間敷候、斯やうにては益なくして罪あるべく候、誰にても貴敬し思ほし候はん人を御請じ候て御受戒あるべしとて、出で給ひければ女院驚き思ほし召して、急ぎ御簾より外へ出させ給ひ、様々に悔み申給ひ、高座に居え奉り、信仰を致して御受戒ありけり、其後は特に上人を貴び給ひて、最後まで深き師檀と成りおはしましけり。

或時上人久く冷病に侵されて、不食し給ひける頃、醫博士和氣の某訪ひ申さん爲に参りたりけるが、此御勞は冷の故なり、山中霧深く寒風烈き間、美酒を毎朝あためて少しづゝ服され給はゞ宜しかるべき由申しければ、上人の仰に曰く、法師は私の身にあらず、一切衆生の爲の器なり、若し予暫くも世に住して益あるべきならば、三寶の擁護により、病愈え命延ぶべし、さらば佛の堅く誠め給ふ飲酒戒をば犯すべからず、予若し藥のために一滴をも服せば何事かなかこつけんと思ひげなる法師共故、御房も時々酒は吸ひ給ひしなんと言ひ出し、此山中さながら酒の道場となるべし云々

承久三年大亂の時、梅尾の山中に京方の衆多く隠し置きたる由聞こえければ、秋田の城の介義景此山に打入りてさがしけり、狼藉の餘り何とか思ひけん、大將軍泰時朝臣の前にて沙汰あるべしとて、上人を捕へ追立て六渡羅へ参りけり、折ふし泰時の朝臣物沙汰して居られけり、軍勢堂上堂下に充滿せり、義景は上人を先

きに立て彼の前に至りて事の由を申す、然るに泰時の朝臣先年六波羅に住はれし時上人の徳を聞き及び給ひしかば、先づ仰天して敬ひ畏れ席を去つて上に居え奉る、此の體を見て義景は謬りし事仕出しけるにやと興覺めたる様なり。さて上人の給ひけるは高山寺に落人多く隠し置きたりと云ふ沙汰の候なり、それはさ候はん、高辨若きより本寺を出て處々迷ひ行き候ひし後は、日頃習ひおき候ひし法文の義理の心に浮ぶだにも更に庶幾はざるところなり、まして世間の事に於ては一度も思量するに及ばずして年久く罷り成り候、されば貴賤につけて人の方人せんと云ふ心起るも沙門の法に有間敷事にて候、亦此山は三寶寄進の處にて殺生禁斷の地なり、仍て鷹に追はるゝ鳥、獵に逃る獸、皆此處に隠れて命を拾ふなり、去れば敵を遁るゝ軍兵のからくして木の根、岩のはざまに隠れ居候はんをば我身の御とがめに預りて難に逢ひ候はんすればとて、情け無く追ひ出して敵のために搦め取られ、身命を奪はれん事をかへりみぬ事やは候べき、我本師能仁の古は鳩に代りて全身を鷹の餌となされ、亦飢たる虎に身を與えられ候ひし、それまでの大

慈悲こそ及び候はずとも、かばかりの事の無くやは候べき、隠す事ならば袖の中にも袈裟の下にも隠してとらせばやとこそ存じ候、若し是れ政道のために難義なる事に候はゞ即時愚僧が首をはねらるべしと、泰時朝臣此仰せを聞き給ひて頻に感涙を流し申し給ひけるは、子細も知らぬ田舎夷ごもの狼藉仕候ひける事返す々々不可思議に候、あまつさへ尊體を之れまで引き入れ申候條恐れ少なからず候云々、さて御輿用意して召させ奉り、門のきはまで自ら送り出し奉りけり、其後世聊か静まりて常に彼の山に參詣して法談申されけり。

秋田の城の介義景は、其後出家して上人の御弟子と成り、大蓮房覺知とぞ云ひける。

ルウソウの懺悔録

之は亦餘りに露骨過ぎるものだと思つた。懺悔録と云ふのであるから自分の耻も過も一切包まず匿さず有の儘をさらけ出して了うと云ふのであらうが、私は採らない。

其れは何も偽り飾つて人を欺き世を誤魔化し、態裁のよい顔をして居るがよいと云ふ意味ではない。

人は神の前に出ては一切隠蔽することなく告白懺悔すべきである。だが人に告て益なき事は寧ろ口を緘して無用の辨を弄すべきでないと思ふ。隠すべきものをも人の前に曝さなければ氣が濟まないと云ふのは即ち裸體露出病であらう。

私は此有名な書物を私の小さな書架に列べて置く譯に行かなかつた。私は他日子供等が私の持つてゐる書物のどれを取出して讀んでも差し支へないものばかりを残して置かうと思ふ。

大學教授某博士の著述

歐洲大戰の頃大學教授博士某の著述と銘打つて或書物が出版された。ところが私の友人が其れは全然獨逸の或書物の翻譯であり、而も處々重要な點に於て甚だしい誤譯が少なからずあると云ふことを、一々指摘して公然其不都合を詰つた事がある。然る

に某はそれにして遂に何等の辨解をも與えなかつた。而して平然大學教授の榮職に居るに差支へなかつた。

當時法科の學生であつた者の談に

『某はあの位の攻撃を受けても多分平氣であるでせう。だがあれでも教授の中では良い方です』

と云ふことであつた。教授も教授であり、學校も學校であり、社會も社會である。最高學府の教授でさへ之れであるものを、風教も道德も在つたものでないと思つた。

〇〇縣下に在る御料林の事

曾て或確な筋の人から斯う云ふ怪しからぬ事を聞いた。

『〇〇縣下に在る御料林の一部が實地に踏査して見ると、其反別が公簿面より非常に不足して居る。それで猶能く調べて見ると、其附近に廣大な別莊を構えてゐる某〇〇と、前に〇〇〇〇をしてゐた某と、御用新聞記者と言はれて有名な某と、三人の物に

分割されてゐる事實を發見した』

と云ふ事である。私は官寮の輩が相結托して何時も斯う云ふ不都合の事を巧にやつて居るに相違ないから、一つ確な調を取つて之を告發しやうと思つた。それで此事を友人の辨護士に談たところ、

『相手が相手であるから大いに揉み消し運動をやるだらう、併し詳細の事さへ判明すれば自分が引受てやつて見る。』

と云ふのである。因つて私は愈々詳細の事實を確めやうと思つて、其運びに取懸つて見ると、肝腎の火元が自分の地位の危険に怖氣付いたと見へて、やれ出張したの、やれ旅行したのと言つて私に會はないやうに遁てばかり居る。私も其事のために幾度か無益に其地まで出懸けて行く氣にもなれず、亦さう云ふ暇も無かつた爲に遂其儘に流れて了つた。

其後どうなつて居る事やら、多分其儘であるであらう。

田中正造翁

此人の名を記憶してゐる者は今猶少くないであらう。世に珍しい誠忠真面目な人であつた。我衆議院にも最初は斯う云ふ人が代議士として出てゐたのかと思ふと今昔の感に堪えない。翁は終りまで鑛毒地方の窮民と寢食を共にして、其救済のために悪戦苦闘を續けたのである。時々東京へ出て來られると必ず巢鴨に新井先生を訪はれたものである。而して刑事は何時も必ず此人に附いてゐた。

或時翁は歎息して

『辨護士に善い者が無くて困ります』

と言ふ。新井先生は其れを聽いて

『一人善い者が在ります。紹介致しませうか』

と問はれた。すると翁は意外なやうに

「辨護士に一人でも善い者が在りますか」

と問ひ返すのである。而して

「若し在るならば御紹介を願ひます」

と言ふ。そこで新井先生は門下の法學士某氏を紹介する事にされたのである。

某氏は固より新井先生の推薦に背かず、翁の没後に至るまで忠實に依托の事件に盡してゐた。

翁の遺骨は渡良瀬川沿岸の村民が分けて行つて、墓が三ヶ所に立てあると聞く。彼の地方の農民が斯くまで此人を尊崇するのは固より當然の事である。

或人の遺言

或人が己の死期の迫るを知つて、其子供等を枕邊に集め

「決して善い事はするな」

と云ふ遺言をしたさうである。私は之が事實の談であつたか或は寓話であつたか忘れ

て了つた。唯此談を聞いた時にそれを單に深刻なる皮肉とばかり思はなかつた。

私は其後も折にふれては能く此談を想ひ出すのである。義理は誤魔化し、責任は免れやうとし、恩に報ゆるに仇、以てするのが珍しくない此世には、人を馬鹿にするを以て得意と爲す者が至る處に在る。而して心ある者を陥れ、苦るしめ、之を懲り々々させて了うのである。

居る處も無い時に

獨り安逸を貪る心は決して持たないが、此世に安んじて居る處の無いことを知る時に吾魂は恰も嬰兒の母を慕ふて其膝に寄りすがるやうな氣持になり、俄に神の御許へと飛んで逝きたくなる。

けれども亦翻つて、どうせ何時までも長く暗黒なる此地上に居る譯ではなし、暫くの間的事であるから寧ろ時を惜み悦んで勤むべきであると思ひ直すのである。而して此地に在つても神が寸時も吾々の傍から離れらるゝ事の無いのを知り、神に頼つて勇

ましく又戰場へ出るのである。

西郷南州

南州翁は私が青年の頃、英雄崇拜時代に最も景慕した故人の一人である。翁の逸話や史實にして感歎すべく敬服に値するものゝ多くは大抵世に知られてゐる。因つて茲には翁が大久保甲東に宛てたる書翰の一つと、翁が無二の知己なる海舟先生の吊詩と終りに會て翁の門に遊んで親しく其教を受けたる元庄内藩諸士が、翁の銅像建立に際して有志に願つた『遺訓』の抜粹と、其卷末に附記されたる追憶の一部とを録する。

一筆拜呈仕候時下春暖相覺申候處愈以御堅固奉賀候干時近來慷慨に難耐事共澤山に有之何より先きに打破可致乎と日夜心痛罷在申候兎角萬民之上に位する者は己を慎み品行を正敷致し驕奢を戒め節儉を勉め職事を勵み人民之標準と相成様注意不致候ては政令も難行候然に草創之際に於て家屋を飾り衣服を華美にし美妾を抱へ候様にては維新の功業は遂げられ間敷也今日と相成候ては戊辰の義戦も偏に私

を營みたる姿に立到り天下に對し將又戦死者の靈魂に對し面目無き次第に御座候左に近作御覽に入申候此吉之助に於て萬一此詩意に相反するが如き事も御座候はば御見限り可被下候申上度事は山々有之候へども書餘は他日緩談可致候。荒々如此候。拜具草々

三月二十四日

西郷吉之助

大久保一藏様

執事御中

幾歴辛酸志始堅 丈夫玉碎愧瓦全

一家遺事人知否 不爲兒孫買美田

吊南州

勝海舟

亡友南州子 風雲定大是

拂衣故山去

胸襟淡如水

悠然事躬耕 嗚呼一高士 只道自居正 豈意紊國紀
不圖遭世變 甘受反賊訾 笑擲此殘骸 以附數弟子
毀譽皆皮相 誰能察微旨 唯有精靈在 千載存知己

『遺訓』の抜粹

○廟堂に立て大政を爲すは天道を行ふものなれば、些の私を挟みては濟まぬものなり、如何にも心を公平に操り、正道を踏み、賢人を撰舉し、能く其職に任ゆる人を擧て政柄を執らしむるは即ち天意なり、それ故眞に賢人と認る以上は直に我職を讓る程ならでは叶はぬものぞ。何程國家に勳功あるとも其職に任へぬ人を官職を以て賞するは善からぬ事の第一なり、官は其人を撰びて之を授け、功は俸祿を以て賞し之を愛し置くものぞ。

○萬民の上に位する者は己を慎み品行を正しくし驕奢を戒め節儉を勉め職事に勤勞して人民の標準となり下民其勤勞を氣の毒に思ふやうならでは政令は行はれ難し、然るに草創の始に立ちながら家屋を飾り衣服を文り美妾を抱へ畜財を計りなば維

新の功業は遂げられまじ、今となりては成辰の義戦も偏に私を營みたる姿に成り行き天下に對し戦死者に對して面目無し。

○事大小となく正道を踏み至誠を推し一事の詐謀を用ゆべからず人多くは事の差し支ゆる時に臨み策略を用いて一旦其事を通らせば後は時宜次第工夫の出来るやうに思へども策略の煩は屹度生じて事必ず敗るゝものなり、正道を以て之を行へば目前は迂遠なるやうなれども後には却つて成功の早いものぞ。

○文明とは道の普く行はるゝを賛稱せる言にして宮室の壯嚴衣服の美麗外觀の浮華を言ふにはあらず、世人の唱ふるところ何が文明やら何が野蠻やら少しも分からぬ、予嘗て或人と議論せしことあり西洋は野蠻じやと言へば否文明ぞと争ふ否野蠻じやと疊みかけしに何にとて其れ程に申すかと問ふ故實に文明ならば未開の國に對しては慈愛を本とし懇々説諭して開明に導くべきに左はなくして未開曠昧の國に對する程むごく殘忍の事を致し己を利するは野蠻じやと申せしに其人黙して

言無かりき

○西洋の刑法は専ら懲戒を主として苛酷を戒め人を善良に導くに注意深し故に獄中の罪人を如何にも緩やかにし鑑誡となるべき書籍を與へ或は親族朋友の面會をも許すと聞く。聖人の刑を設けられしも忠孝仁愛の心より寡孤獨を憐み人の罪に陷るを憂ひ給ひしに相違なれども實地手の届きたる今の西洋の如くなりしや否や書籍には見へず、之は實に文明じやと感ずるなり。

○租税を薄くして民を裕にするは即ち國力を養成する事である、故に國事多端にして財用の不足に苦むとも租税の定制を確守し上を損して下を虐げぬものなり、能く古今の事跡を見よ道の明ならざる世にして財用の不足に苦む時は必ず曲知小慧の俗吏を用い巧みに聚斂して一時の缺乏に給するを理財に長せる良臣となし手段を以て苛酷に民を虐ぐる故人民は苦惱に堪へ兼ね聚斂を逃んと欲して自然譎詐狡猾に趣き上下互に欺き官民敵讐となり終に分崩に至るにあらずや

○常備の兵數も亦會計の制限に由る、決して無根の虚勢を張るべからず、兵氣を鼓舞して精兵を仕立なば兵數は少なくとも折衝禦侮共に事缺くまじ

○節義廉耻を失つて國を維持するの道は決してあらず、西洋各國同然なり、上に立つ者下に臨んで利を争ひ義を忘るゝ時は下皆之に倣ひ人心忽ち財利に趨り卑吝の情日々に長じ節義廉耻の志操を失ひ父子兄弟の間も錢財を争ひ相敵視するに至らむ此の如く成り行かば何を以て國家を維持すべきぞ

○何程制度方法を論ずるとも其人にあらざれば行はれ難し、人在つて後法の行はるゝものなれば人は第一の實にして己其人に成るの心懸け肝要なり。

○道は天地自然の道なれば講學の要は敬天愛人を目的とする、身を修むるには克己を以て終始せよ、己に克つの極功は母意母必母固母我と云へり、總て人は己に克つを以て成り自ら愛するに因つて敗るゝものなり。

○道は天地自然のものにして人は之を行ふ者なれば、天を敬するを目的とす、天は人も我も同一に愛し給ふゆへに我を愛する心を以て人を愛するなり。

○人を相手にせず天を相手にせよ、天を相手にして己を盡し人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。

○己を愛するは善からぬ事の第一なり。修業の出来ぬも、事の成らぬも、過を改むることの出来ぬも、功に伐り驕慢の生ずるも皆自ら愛するがためなれば決して己を愛さぬものなり。

○道を行ふには尊卑貴賤の差別なし、摘んで言へば堯舜は天下に王として萬機の政治を執り給へども其職とするところは教師なり。孔夫子は魯國をはじめ何處へも用ゐられず屢々困厄に逢ひ匹夫にて世を終へ給ひしかども三千の徒皆其道を行ひしなり。

○道を行ふ者は固より困厄に逢ふものなれば如何なる艱難の地に立つとも事の成否身の死生などに少しも頓着せぬものなり、事には上手下手あり、物には出来る人、出来ざる人あり、自然に心を動す人もあれども、人は道を行ふものゆへ道を踏むには上手下手もなく、出来ざる人もなし、故に只管道を行ひ道を樂み、若し艱難に逢ふて之を凌んとならば彌々道を行ひ道を樂むべし、予壯年より艱難と云ふ艱難に罹りしゆへ今はどんな事に出會ふとも動搖は致すまじ、それだけは仕合せなり。

り。

○命もいらす名もいらす、官位も金もいらぬ人は始末に困る者なり、此始末に困る人ならでは艱難を共にして國家の大業は成し得られぬものなり、去れども斯やうな人は凡俗の眼には見へないものである。

○道を行ふ者は天下擧つて毀るも足らずとせず、天下擧つて譽むるも足れりとせざるは自ら信ずるの厚きが故なり、其の工夫は韓文公が伯夷の頌を熟讀して會得せよ。

○道に志す者は偉業を貴ばぬものなり、司馬溫公は閏中にて語りし言も人に對して言ふべからざる事なしと申されたり、獨を慎むの學推して知るべし、人の意表に出て一時の快適を好むは未熟の事なり戒むべし。

○聖賢にならんと欲するの志無く、古人の事跡を見て逆も企て及ばぬと云ふは、戦に臨んで逃るより猶卑怯なり。

●追憶の一節

噫翁乎天資英邁の質を驅りて深く堯舜の道に入り固く克己の學を執りて篤く上天の命を敬す寛能く衆を容れ仁能く人を愛し王に勤めて能く忠人に與みして能く信事に臨みて能く敬變に處して能く義思慮深淵にして規模宏遠明に萬國の要領を知り審に彼我の長短を辨じ幕府の奢侈文弱を革め武を振ひて文明を敷んと欲す事を措し業を創する必ず敬して天意を迎へ務めて大體を立て其本源を凡庸の測知する能はざるの前に定む難きを先にし獲ることを後にし必ず數世の後を期して之を處す處するに臨みては事の難易を問はず身の患害を顧みず造治必ず道に於てし顛沛必ず義に於てす之を望めば洵々として技能無きの人の如く大節に臨み疑事を決するに當りて一度言を出せば神明英發正大の氣蕩々として江河を決するか如く能く之を禦むるものなし居處恭儉にして深く驕泰を戒む身上將の尊に處り群臣の上に立つも宅舍陋隘衣服菲薄閨に妾媵の汚れなく室に絲竹の娛みなし官給の餘すところ盡く之を親戚朋友の急に周す王事鞅掌の中常に綽々として餘裕あり道に志すの

士教を請ふ者あらば循々として之を導き倦怠の色なし其閑話清談の時にあつては溫容暖々膝を枕し眠るべく道義を論じ國事を議する時に當つては峻貌嶽峙辭氣嚴厲人をして凜然として心形俱に肅し精神頓に發せしむ仰きて天に愧ず伏して人に耻す夫れ此の如し故に其冠を掛けて故山に歸るや三州の士民老者は之を安んじ朋友は之を信じ少者は之に懷く海内の士皆領を延きて南望し其風采を想慕す實に人倫の表正にして五百歳の名世なり云々

露國饑饉の際

往年の露國饑饉の慘狀は實に言話に絶するのもであつたらう。歐米に於ては何れも之が救濟運動に可なりの力を籍してゐたにも拘はらず、我國に於ては朝野閥として更に知らざるものゝ如くであつた。多分彼等が暴逆を敢てした爲めに當然蒙るべき天罰とても思つたのであらうか。兎に角天下に隠れない非常な天災に、幾百萬の人間が餓死しつゝあるに對して、吾等の多數は冷淡にも一椀の食をも願たうとはしなかつたの

である。只僅に一部の學生達が同情ある催しと、社會主義者の企に應じて極めて零碎なる醜金の集められた事だけは聞いてゐたが。或は其他にも黙し難しとして運動を起した者があつたかも知れないが終に物に成らなかつたと見える。

私は其當時東京の最も大なる二つの新聞社へ義金募集の事を勧めてやつたが更に何等の反響もなかつた。亦基督教徒中の有力なる人々にも書面を出して見たが之れも返事だになかつた。其上に出過ぎた事でもしやうものなら只赤化宣傳者とても疑はれる位が落で何にもならないに極つてゐると此事は諦めて了つた。

斯う云ふ不仁な事を天下に示して置いて、それで國民の教化とか、民心の善導とか言つたところで、其れは總て生臭坊主共の説法と同様である。

徹底的改造

君子は獸相食む猶見るに忍びすと云ふ。人間の生活を無政府状態の下に放任して勝手な競争を恣にさせて置く事は人として忍びざる亂暴な事であり、無智な事である。

併しながら只物質的生活資料の生産分配が善く安排されて一人の衣食住に事欠く者が無いやうに成つたからと言つて、それで人は平和に、争いなしに、幸福に暮し得らるゝものでないことも明ではないか。それは手近く一家の内、夫婦兄弟の間に於てさへ不和不興の少くない理由を思へば解る筈であらう。吾等の根性が此の如く曲つて、今日の如くに心が暗くなつたものを、單に外部の状態だけを如何に改善したればとて結局どうにもなるものではない。

忘れる以上に神を忘れて了い、神を求むる心さへ失つて了い、人類が眞に兄弟姉妹であることを知らないで、それで何の善い事が地上に興り得やうぞ。

制度の改新を要するは無論であるが、如何に困難であらうとも、幾百千年を重ねやうとも人心の奥底から改造が出来て來ない間は斷じて人の世に平和も幸福も來るものではない。改造も徹底的にしなければならぬ。

數十年前誰か理想に夢みた代議政治なるものが今日のやうな有様にならうと想像しやうぞ。同じ事は到底一つ事である。

或中學先生の述懐

舊友M氏は大分長く中學校の先生を勤めてゐる人である。或時私の處へ遊びに来て「縣下に縣立中學が四つ在る中で自分の居る學校が先づ一番善いと云ふ評判であるが實は近頃校長其他一二の職員と特に協力して是非匡正しなければならぬと切に苦心しつゝある弊風が生徒の間にある。斯う云ふ風であるから自分の口から言ふのは甚だ不本意であるが、自分の子供は他に何んとか道のあるものならば中學へは入れたくないと思つてゐる」と云ふ談をした。之は心ある者が今の一般の中學に對する正直な述懐であらう。

定見深睡

勝海舟先生は度々「定見深睡」と云ふ文字を書いて人に與えられたものである。それは意味の深い言であると思ふ。

人は日に新に又日々に新に進まなければならぬものである。苟も之れで善いと極めて了へば其人は即ち深い睡りに墮たと同じで死んだやうなものである。動かない處に進歩はない。宇宙は動いてゐる。瞬時も止むものではない。精神的に死んだ者のみが動くのを恐れ、固定の見を持って安定を夢みてゐる。

思想の動搖を恐れ、俗吏をして之れが善導を期せしむる如きは最も滑稽の沙汰である。

歴 史

小學校や中學校で子弟に教ゆるもの、中所謂歴史なるもの程馬鹿らしいものは無いであらう。大概は只之れ殺伐野蠻なる喧嘩の記事ばかりではないか。殆んど權勢の爭奪を之れ事とする者の事績ばかりではないか。其れは全く詰らぬ無意味のもので後には大抵忘れて了うものであらう。亦忘れて差支へないもの、寧ろ忘れた方が善い程のものを強いて子弟の腦裏に深く刻み附けやうと企つるのは何のためであるか。特に